355
741

児童手紙文集

たよりの泉

始

特233
816

帝國圖書館藏

鈴蘭のたより

帝圖

大幡川を渡って平栗へ越す峠の中腹、私は一日余りにもしほらしい鈴蘭の一株を朽木の香のたゞよふ斜面に思ひかけなくも見出だした。

ほのかに上品な、その花の香は物語めいた秘密をつゝんで居るかの如くそよ風に吊れて、思はずも私を其の場へた、ずませたものである。勿論懐古的な氣分に尠からず陶酔させられて居た私であるが故に……

甘利山の鈴蘭の大聚落、私はそれをまた知らない。

然しこの一株の鈴蘭こそ、また見ぬ甘利山のそれ等よりもはるかに氣高く清楚で何かしら尊いものであるかのやうに私には思はれてならなかった。

深山辺に人知れず馥郁と匂ふ此の香を愛しんで、「誇る事を知らぬ美しの花」とひとりごちながら、何時までも眺めつゞける私だった。私にのみ見出されたのではないかと思はれるあの鈴蘭が、それでもその事に満足して散って行ったたらうと想像し、せめてはその花のいのちを無意義に終らせたく無く私はこの序を書いた。

秋枝

高橋勲
大正九・一〇・五生
宝村高畑
讀書を好む
学科は地理
希望 鉄道員
今満洲國公主嶺泉町三丁目四番地居住

弟、け
を、す
貴君、貴君
友 變
く、て
些、さ
断 断
船、船
の、か
ホ、な
ま、に

遠足の様子を友に報す

高二 高橋勲

一筆申上げます。

だんだん暖くなって参りまして、貴君には何のお変りも御座居ませんか。御家内様にも皆々御健勝の事と存じて居ります。僕等も丈夫で働いて居りますから御安心下さい。

去る十三日は僕等にとってたのしい遠足の日でした。そのコースは、先づ三峠へ登り國道八號線を通って河口湖へ出、湖をボートで横断して船津へつき、其處から自動車に乗って吉田、吉田から今度は電車で谷村、それから歩いてかへる事になって居たのです。

本校を午前六時に出發して、およそ三十分にて御座石につきそ

高等、高等
水筒 たう
凛々 りんりん 勇しい 身にしみる
崎、時

れから御座石の生徒を先頭にして出かけましたが僕等高等科は一番後でした。二町程行くと林道へ出る。四方皆緑に色どられて美しく、その中に朝の静かさを破るものは生徒のこゑと谷の水の音だけ。黒木橋を渡り千段橋へ近づく。此の近くに千段瀧といふ瀧があるのです。それから少し行ってから水筒の水をとりかへました。石小屋で暫く休息して又出かける。皆勇氣凛々。
ふと今来た道を振り返って見ると霧がしきりに追ひかけて来ました。
僕は思はず「あッ寒い〱」と言ってしまひました。山は実際寒いです。
観音さんで一休みしてから又歩き出しました。それから漸く頂上に着いた。崎の感はたとへやうもありませんでした。三峠の下には河口湖がありま

地圖、地圖
開、開
頂上、頂上
残、を
蜿蜒、蛇のわだかまること、うね〱と曲りくねることを、えん〱とよむ
交渉 かうしやう
鵜、島 河口湖中にある島 弁天あり

た。中部地方の地圖を開いて御らんなさい。富士の周圍に五つの湖があるでせう。その中で一番大きいのが河口湖です。そして はるか向ふに見えるのが西湖です。
頂上でべんたうを食べてから茶屋の前を通って國道八號線へ下りました。蜿蜒とした道が長くつゞいて居りました。此の道を切りひらくには八十一人も二人か死んだといふ難工事でした。八號線を歩いて河口村へ来て見ると、波がざぶん〱と岸を洗って居りました。そして先生が船頭と交渉をしてボートへ乗る事になった時、僕等の喜びは非常なものでした。
ボートで鵜の島へ寄って船津へ着いた。其處から一里ばかり歩いて

吉田へ行く事にしてありました。僕等は非常に疲れて居りました
が元氣を出して歩きました。其の途中、日本の英雄武田信玄の鐘
掛松を見たり、乗用自動車が八臺も續いて通ったのを見たりした。
吉田驛へつくちよっと前、生憎雨が降り出して來たけれども、僕等は
悠々として歩いて行った。そして吉田驛に着いて土産物を買って
電車で谷村驛まで來てから解散しました。
僕等は自動車三臺に分乘して帰座石へかへりましたが、家へか
へると急に疲れが出て來ましたので、遠足の話をちよっとしてから床
へ入りました。
何よりもとても愉快な遠足でしたから、お知らせした次第です。

疲れる 疲れる
鐘掛松 信玄出陣の時鐘をかけたとの傳説、昭和十年競し土民他の松を植ゑて之に代えた
續、續
生憎 あひにく
悠々 ゆふゆふ ゆつたり
土産、みやげ
遠足、遠足
愉快 愉快
知、知

ではお身体を大切にして刻苦勉勵して下さい。僕も大いに負けな
いやうに一心に勉強します。その中又おたよりしませう。
僕の親愛なる友よ。 さようなら

高二 前田鹿造

姉によせる

姉さん。 大分あたゝかになりましたね。
姉さんがまだこちらに居る頃は何とも思はないで居りましたが
いざ遠く離れてしまふと大変懐しくてたまりません。
姉さんが信州へ行く時は僕はまだ無邪氣でさくらの花を持つ
て遊んで居りましたが、その頃の事を考へると全く姉さんにも

刻苦勉勵 一心にくるしみはげむ

前田鹿造
大正九・五・一生
宝村大幡一五八八
讀書、野球、蹴
方国史を好む
希望呉服店か鉄道員
今東京市神田区須田町二丁目十九番地
高部商店内

まないと思ひます。今になっては何うする事も出来ませんのお許
し下さい。
諏訪湖の氷も青々としてねえさん達の心を洗ふののやうにたたへ
てゐる事でせう。姉さんにはその後何のお変りもなく達者で
働いてゐらつしやいますか。僕等の方は櫻の今開かうとして居
ます。　僕は去年こそは本氣になつてと思つて居ました
が、落第をやつとのがれた位のお恥かしい成績でした。ただ學
校を一日も休まなかつただけです。　今年こそ何とかしてよい
成績を取りたいと今から一心です。　姉さんもお家のため精一杯
働いて下さいね。
ではさよなら。
弟より

何、何
氷、水
後、後
櫻、櫻
者、は
本氣、本氣
と、よ
精一杯　力のあるだけ

出産を祝ふ

高二　鈴木忠重

拝復
御手紙ありがたく拝見仕り候　暖氣日に増し、まことに凌ぎ
よき氣候と相成申し候處　皆々様御一同打揃ひ御健勝の
由承り謹みて賀し奉り候　降って小生等一同無事暮し居
り候間
御安心下され度候
御手紙に依り候へば　去る十九日伯母様には玉の如き男子を
御分娩の由　家内一同大驚き致し喜び合ひ申し候　小生も
大変うれしく　早速お顔拝見に参上致し度思ひ居り候へども
遠隔の地に住む事とて　それも致し兼ね候へば　何れ適當の

鈴木忠重
大正一〇・二・二七生
室村高畑
五一四八
読書読方算術を好む
希望、鉄道員
今山梨縣南巨摩郡郡□村
都川金小
松野谷與之郎
様方居住

拝復　返信の冒頭へ用ふ
拝見、拝見
候文にて候の文字を行の最初へかくべからず
分娩　ブンベン　出産のこと
小生の文字は文中各行の半以下へ、出来れば小さくかくこと

別封 ベツプウ 別に包んだ品
寸志 スンシ ほんの僅かの心ざし
笑納 セウノウ つまらぬ物だと笑って受取る謙遜の語
旁々 カタガタ のついでに、
頓首 トンシユ 結尾語

高部武則
大正一〇・三・二三生
宝村下大幡 二八九
図画体操を好む

日をえらびて参上仕るべく候
別封の品誠に粗末なものに候へども小生の寸志に候へば
何卒御笑納下され度願上候
先は御祝ひ旁々赤ちゃんの御健康を御祈り申上候
頓首

五月廿六日
鈴木忠重

伯母上様

拝復

進級を報す

先日は御手紙有難う御座いました。

高二 高部武則

希望蔵業家

如き き
今日 今日
思 思
今度 今度

加藤清
大正一〇・六・一〇生
宝村高岡 五一四八
読書園芸

もうこちらも春が来て梅やすみれやたんぽゝが咲き日中はぽかぽかとあたゝかいのです。その外色々の花が咲き出しました。今日はよいお天気だと思って朝起きて見ると思ひの外な雪がちらちら降ってゐました。雪が降っても氷が張ってももう叔父さん春です。私も今度第二年になりましたので一生懸命勉強してえらい人になりたいと思ってゐますから御安心下さい

尋二 加藤靖

拝啓

進級を報す

久しく御無沙汰致し申しわけありません。我の寶

好む
希望 家業 手傳
今山梨南都留郡
郡忠村忠鉱
山採鉱場勤
務(昭和九.六
二三退学)
駘蕩 タイタウ のどかなさま
あげ. ます
お前. 御身
清. 清

の山里も いよく冬のねむりからさめて春の氣分となり、暖風は
義の額残拂ひ 時には春雨も降り、梅は今や希望のつぼみき
綻は笑んとし、春風駘蕩たるの時の訪れて参りました。
叔父さんの御一家は何のお変りもありませんか。御伺ひ致しま
す。 梅のつぼみとともに進級した僕は、今年こそ優秀な
成績を以て卒業せんことを希望して止まないのです。
又八月の夏休みには是非とも御地へ御厄介になりに参ります
故その時は何分よろしくおねがひ致します。
では御身御大切に
清

柴田貫三
大正一〇・五・三〇
宝村上大幡 二五一一
読方国史を好む 運動
希望商店の主へ今家
それ. これ
此. の
家内. 家内
暮. 暮
て. て
い. い
よ. よ
学校. 學校

春になって

高二 柴田貫三

あゝの生草れ中から芽を出した草、この暖い天氣に蝶の舞ひ歩いて居ります。山々には梅の花が咲いてみんなを呼び寄せて居ります。
おおさん御丈夫ですか。僕等は元氣でぴんくして家内たのしく暮して居ります。何うぞ御心配しないで下さい。父は毎日毎日畑へ出て働いて居ります。妹も元氣で歌をうたったりして仲よくあそんで居ります。僕は高等二年へ進級しました
今年一年で学校生活を終るので、僕は最後の一年だけ立派にやりとげるつもりで一心になって勉強する覚悟で居ります。

ゐ、た
身体、身体
近況、近況
も、も
ち、ち
出の後　其の後
有り、あり
君達、君達
卒業、卒業

ゐ、それから忘れて居りましたが先日は母が参上して長い間御厄介になりましたこと厚く御礼申上げます。

何うぞ皆様にもよろしく。　ではお身体をお大切に。

近況報告

高二　鈴木忠重

遠山に霞たなびき小川の水も氣もちよさそうに流れ、道にもせに咲くたんぽゝやすみれのかほりなつかしいのどかな日となりました。　君にも其の後お変り有りませんか。

月日のたつのは早いものですね。「君達」の卒業し僕等の高等二年に進級して早くも一月は夢の間に過ぎ去ってしまひました。

桜、櫻
思、思
深山、澤山
免、め
室、室
窮屈　キウクツ
思ひ出せば　想ひ出せば
通学　通學
有、あ
思出、思出
遊、遊

神戸へ出て行かれた君は壮健で働いて居られるでせうね。こちらは今桜の散って桃と八重桜の真盛りです。君も郷土や母校が定めしなつかしく思はれてならないでせう。高等科の受持は矢張天野先生です。もとの六年の深山高等科へ入学した免、教室が大変窮屈です。去年より約二十名より児童数が増したものですからね。

思ひ出せば去年まだ僕が高等一年生で通学してゐるころ、君とお便所の掃除のことからけんくわして、僕が早く家へ逃げ帰った事が有ったっけね。今考へるととてもなつかしい思出の一つとなりました。　その外一緒にたのしく遊んだ事など

比、の
多、た
人物、人物
奮励、奮励
出、れ
里、り
土屋庚子
大正九・一一・一生
宝村大幡　四二六七
読方裁縫を好む
希望、裁縫か手藝
今家にあり
阿、あ
青々、青々
免、め

筆を取ってゐる僕の目の前にぼうっと浮んで来ます。あゝもう時計が九時を打ってしまひました。では僕も一生懸命に勉強して國家の有益な人物にならうと心がけますから君も奮励努力して大いに山梨縣人の名をあげて呉れ給へ。終に君の健康と成功とをお祈りします。さようなら

卒業せる友へ近況を報す　高二　土屋庚子

大變あたゝかくなりましたね。此の山間の里も草木青々と茂り、凡てのものが冬の眠りから覚めて活動し始めました。お別れしてからもう一月過ぎてしま

歯、ま
私、私
止、と
天野、天野
進級、進級
五十、五十
就、就
色々、色々
思、思
さ、さ
花、花
八重桜、八重桜
風、風
れ、れ
貴女、アナタ
貴女

ひましたね。あなたはその後おかはりありませんか。私も相変らず通学して居ります。受持の先生は去年と同じく天野先生です。もう五月進級して一月たってしまひました。私達高等科は全部で五十人以上居ります。

遠足の近附きました。遠足に就いて色々去年の旅行のことが思ひ出されてなりません。とてもあの時はたのしかったっけね。

今こちらに咲いてゐる花は　つゝじ、山吹、八重桜などです。みんな大きく伸び伸びて私達をはげますやうに、時々風に吹かれて枝をゆすります。私達も一心になりませうね。

学校にて貴女の幸福をお祈りします。御身大事に。

前田かず子　大正九・四・一五生　宝村中津森　三六八
算術手藝を好む
希望は家事の手傳。
昭和九・六・二八退学　今家に在り

ます、ます
だけ、だけ
一緒、一緒
様、様
悪、悪
如何、如何
致、致
暮、暮
お祖母さん　おばあさん
安心、安心

病める伯母に近況を傳ふ

中退　前田かず子

あたり一面霞につゝまれてねむいやうな氣候となりました。その中にくっきりと池のふちの水仙だけが、元氣よくすくすくと延び出しました。去年一緒につみに行った石垣の紫すみれももう花を開いたのもあります。

此のごろ伯母様には大変お身体が悪く入院せられたとの事、その後如何で御座ゐますか。お伺ひ致します。私どもの方もつゝがなく暮して居ります。長い冬の間寝つゝ[illegible]やうにねて居たお祖母さんも晝間だけ位起きて居られるやうになりましたから御安心下さい。私も長いやうな短いやうな一年を過し

事、事
今更、今更
驚、驚
を
様子　様子
御無沙汰　御無沙汰
初夏、初夏
勉強、勉強
運動、運動

てやうやう進級する事になりました。矢の如く走る月日に今更の如く驚かされます。

青草の芽に今日白雪はしきりに降りそゝいでゐます。陰ながら皆さまの御健康ならん事をお祈りして居ります

昭和九年四月六日

かず子

友に遠足の様子を知らせ

高二　土屋庚子

御無沙汰して誠に申訳ありません。

知らぬ間に五月となりましたね。もう初夏と言ってもよい位です。勉強、運動、仕事、その他何をするにも適して居る時候ですね。

春季、春季
すませ、すませ
出發、出發
朝、朝
大喜、大喜
疲、疲
食物、食物
に、は
まだ、まだ
八號線、八號線
彼方、彼方
鵜の島、鵜島
見え、見え
雨、雨
め

私達は五月十五日春季遠足をすませました。

五時半に出發して三峠へ向ひましたがその日の朝は相変らず晴天だったので、一同大喜びで勢よく登りました。頂上につくとみな疲れたのも忘れて飛び歩いたり、食物をころがしたりして喜びました。頂上はまだ冬のやうに寒く、周囲を見ても枯木ばかりでした。

八號線を通って河口湖につきますと、広く〳〵つゞく湖の彼方に鵜の島が小さく浮いて見えました。青い湖に空は澄みきったやうな白い色を浮して、雨が少しづつ降りはじめました。ために私達は船に来るまで一時間も待ってそれから雨の中を船で鵜

富士、富士
あをく、青く
梨本宮様、梨本宮様
御別邸(ごべってい)
御別邸
本邸の外の邸(べっそう)
色々、色々
説明、説明
に、は
電車、電車
無事、無事
簡單、簡單(カンタン)
あ、す
れ、の
と、よ

の島へ着きました。鵜の島から船津へと進みました。船の中で富士の裾のあをく美しく長引いて林の行儀よく並んで見えました。そして先生がその林や岸の岩石、梨本宮様の御別邸等色々と説明して下さいました。間もなく船津に上陸して吉田驛に急ぎました。雨は次第に大降りになりましたが吉田から電車で無事に帰る事が出来ました。

乱筆ですが遠足の様子を簡單にお知らせます。 庚子 (5.20)

あゝらんれたより

寄稿 廣瀬きこと

廣瀬さとよ 大正七・一一・六生 西山梨郡里垣村板垣
讀書、國史を好む。花では鈴蘭
昭和十年三月甲府高女を卒業し今家庭にあり。
天野の第一回の教子。

げ　す　後　は　も　さ　御無理　な　に　色々　見　頂　昨日　氣　行　參

先生、一筆申し上げます。
その後は何のお變りも御座いませんか。先生の事で御座ゐます
から、又文集でこれ おくるしみになって居らっしゃるんぢゃないでせ
うか。 若しさうで御座ゐましたら、余り御無理をなさいま
せんやう。 近くに私が居りますなら お手傳ひに行くんですけ
ど、こんなに遠くては 何う致す事も出來ません。
先生、私もう四年生になりました。早いものですね。入學すると
色々御面倒見て頂いて、叱られたりした事もつい昨日の事
のやうな氣がして居りましたのよ。
五月一日から八日まで修學旅行に行って參りました。初夏の若草

は　本當　さ　番　思はれ　さ　の　旅行　し　され　さます　も　見　よ　程　御無沙汰

山、吉野は本當に美しう御座いました。そして京都の夜の
町も……………
でも旅に出ると自分の家がとても戀しくなりますのね。やっぱり
自分の家が一番よいやうに思はれました。そして夜などはや
たらさびしくなって昔の事のしきりに思ひ出されます。小学
校の旅行の事なども しきりに思ひ出されて、なつかしい氣のし
てなりませんでした。 哀音しきりに人のねむりを呼びさますと
小學校の讀方で習ってゐた あの春日神社の鹿も見ました。よ
くまあと思はれる位人になれて居ります。
旅行のたよりのこんなにおくれてしまふ程御無沙汰して

申譯・申譯
座・座
帝・け
筆不精 フデブショウ 字を書くことをなまけること
甘利山 アマリヤマ 甲府盆地の西辺にあり鈴蘭の名所
も・は
若草山 ワカクサヤマ
な・な
草木・草木
鈴蘭 スズラン いちやくさう きみかげさう
まみ々・まみれて
雜草・雜草
露・露
お・度
連・連

誠に申譯御座いません。いつもおたよりしやうと思って机に向ふのですが　どうしても書けないのです。筆不精には生れつきたくありませんね。

あ　それから　この前の日曜に　甘利山へ上りました。甘利山は素敵で御座いました。先生もお登りになった事御座いますか。あの奈良の若草山のやうに　なだらかな山肌一面に美しい草木が生え　あの可愛らしい鈴蘭が咲き乱れて居りました。

廿ハラ池は一面霧にまみれて　山岸の雜草は露にぬれ　歩く度に露のころが落ちるのなんか　本当に何とも言はれません。もう一度　甘利山へ連れて行って頂きたくてなり

故・度
ま・す
も・は
私・私
一番・一番
草・草
見・見
れ・れ
志為・した
も・は
今度・今度
予定・豫定
寄・寄
思・思
す
致・致
す

ません。今度は山でキャンプでもしたいと思って居ります。すずらんは私の一番すきな花として　先生の作って下さった私達の文集の中にのって居りますね。山で草の上へねころんで思ひ切りすずらんのにほひを吸ひました。まるで夢を見てゐるやうな感じがしました。昔の文集の事なども　しきりに思ひ出されました。

三峰は甘利山よりずっと樂だそうですね。學校では今度富士と三峰へ登る予定です。出来るが都合してお寄りしたいと思って居ります故、もしもお寄り出来ましたならその時はどうぞよろしくおねがひ致します。

勉強、勉強
致、致　行、行
夏、夏
す、す
沢山、澤山
に、す

もうそろ〳〵試験も始まる事でせうから一生懸命勉強致します。三峰行は大抵この第一回の試験が終ってからか夏休に入ってからになるでせう。

ては余り長くなりますから又この次に書きます。とりとめのない事をズラ〳〵書いて読みにくいところが沢山あるでせうがお判じねがひます。

随分お身体を大切に。　さよなら

葉、葉
拝復、拝復　御手紙、御手紙
拝見、拝見
致、致

葉がき文

高二　土屋良子

拝復　御手紙ありがたく拝見致しました。

け、す
家、家　皆、皆
い、い
こちらも、こちらも
天野先生、天野先生
嬉、嬉
近、近
無駄、無駄
おかげながら、かげながら
幸福、幸福
御身、御身
見、見
秋寂、秋寂

花枝さんにはお達者で何よりの事と存じ上げます。私達一家も皆丈夫で働いて居ります。こちらもあたゝかくなりました。野山は緑となり木々は今實を結ぼうとしてゐます。私達この楽しい春をむかへて例年通り天野先生に教つてゐます。嬉しくそして面白い遠足も近付きました。此の一年を無駄にせず一心に努力するつもりです。おかげながらあなたの幸福を御祈りします。

では御身大切に　さよなら

秋寂

見おくりに答へて　(一)

秋家平次郎
明治四十一年生
南都留郡中野村平野三四一一
一人きりで本を讀むか僅かの人としんみり話すか人のゐない野山を散歩することが好き
今宗小學校に在り
一杯　イツパイ
氣持　氣持
ち　は
擔任、擔任
任地かかはること
突然、突然
驚き、驚き
れ
極み、極み
現實、現實
目前に表れる實際

皆さんは驛まで送って頂いて、本當はありがたう御禮を申
ました。送って下さった皆さんに、御禮の言葉さへ充分申
し上げる事の出來なかった程、私のこころは言ひ知れない寂し
さとかなしさとで一杯でした。でもいくら御禮を申し
上げなくても、私の氣持ちはきっと皆さんは分って戴けると信
じて居ります。
僅か一年、よしや擔任はしないだらうと、大きな希望と計畫と
を胸に抱いてゐた私は、突然おそひかかったかなしい運命、「寶
への擔任」夢かと驚き、ゆめなれと祈る私のねがひは哀れ破
れ、かなしい極みの現實に泣きながらも、涙の別れをしなけ

重、重
春雨、春雨
増さ、さ
せ、せ
雨、雨
汽車、汽車
見、見
皆、皆
靈峰、靈峰
神山のこと
玉諸、玉諸
薫風、クンプウ
南より吹く風
夏の風
稲穂、稲穂
砂塵、サジン
砂ほこり
亭々、テイテイ
すらりと高いさま
運動場、運動場
朝集會、朝集會
晴、晴

ればならない私でした。
笹子峠を越えたら、どんよりと曇った重い空から絹糸のや
うな春雨が煙って居ました。私のかなしみをいやが上にも増さ
せるやうなこの雨を汽車の窓に見ながら、皆さんの事のそ
れからそれへ思ひ出されてなりませんでした。
白雪を戴いた日本アルプスの連山を望み、靈峰富士をは
るかに仰ぐ玉諸、薫風に稲穂のさゝやきをきゝながら、青田の
中に靜もる校舎、木枯に渦巻く砂塵のみち、雨の日のぬかる
みと、川舟の通學、等々。ポプラが亭々と青空にそびえた
運動場の朝集會で、あの高い踏台の上から日本晴の空を

皆、皆
か事、かけ
事はければは
程、程
一度、一度
慾望、慾望

遂、遂

聲、聲

顔、顔

谷村横町駅
谷村横町驛

眺めながら皆さんは大きな声で呼びかけたのも今はもう昔のこと。 恐らくあの台の上から再び皆さんは呼びかける事は出来ないでせうが、それが出来なければ出来ない程、今一度ちらつして見たい慾望が、しきりに湧き上って参ります。
そして尚まざまざと私の脳裏から消え去る事の出来ないもの、それは汽車の窓から段々小さく遠ざかって遂には見えなくなってしまった皆さんの姿、ホームから呼んで下さるさよならの聲、打ち振られる手、はんかち、帽子、うるんだ眼の底にうつる顔、顔、顔。 みんななつかしいかなしみの姿です。
谷村横町駅、其處へ着いたのが午後一時ごろでした。それ

無理、無理
自動車、自動車
残 を
寛、寛
学校、學校
恰度 チョウド

玉諸、玉諸

様々 様々
高等 高等
読方、讀方
擴げ 擴げ

から無理に自動車も来らず、春雨の中残情ない氣持で寛の小学校へ歩きました。恰度さうある事が、今の私の氣持にぴったりとあてはまるやうに思はれましたので……
新しい学校へは来ましたもの、矢張皆さんの事で私のこころは一杯です。授業が終って児童がみんな帰ってしまふと、きっと私は誰も居ない教室で児童の机によりかかって玉諸ちこと残、様々に思ひ出します。 今年又高等科の受持、算術の教科書を開いても讀方の本を擴げても、その一題々々に、一語々々に、かぎりない去年の思出が湧き上って、ふと壇上で黙ってしまふ悲しいくせがつきました。

何、何
わ生　われ
寄、寄
さ、さ
せ、せ
れ、れ

何のなし子等をおもへは口つとむ
　わ生となり華り壊ま立ち居て

児等は今何し居るらん放課後の
　窓ま寄り来てふと見たる空

わめ華涙華くるへ雄叫へ我のこころ
　之れせまりつつ何か空ひしき

國中の空がやたら懐しく思はれて、此一線玉諸の学校へかへってゆきたい希望がむくむくと頭をもたげて来ます。だけどもう今になっては何うする事も出来ません。どうせ何時か一度は必ず別れなければならない運命にあるんだからと

校庭、校庭（コウテイ）
様子、様子
想像、想像（ソウゾウ）思ひ浮べること
天地　天地
盆地、盆地
悠々、悠々（ユウ）ゆったり
絆　キヅナ　つな　なわ
辷る　スベル
櫻　櫻
愉快　愉快
静、靜
續　續

悲しいあきらめ残して居ます。唯皆さんが元氣で愉快にあの校庭のポプラのやうにスクスクと大きくなってゆく様子を想像してそれを何よりのたのしみとし、閑寂な天地ではるかな盆地の空を仰ぎ、悠々と辷る白雲を眺めながら、一度は切っても切れぬ絆で結ばれた皆さんとのなつかしい思出にこころゆくまで浸って居たいと思ひます。

甲府のお城の櫻が咲いて春が南から訪れて参りましたね。花を迎へ、鳥を迎へて、矢張「元氣で愉快に」さう私は繰りかへしておきませう。

静かな夜です。私は唯ひたすらに心を静めてのき続けて参

無事　無事
我を
様、様
幸福　幸福
擱きます

態々　わざわざ
私　和
重　重

残念、残念

りましたが、愈々最後に、盆地の空の永えに平安無事なる我
願ひそして又盆地に住む皆様方の幸福をお祈りしながら
ペンを擱きます。

昭和八年四月十三日　天野三郎

玉諸小学校児童諸君

追伸

尚態々汽車に乗って酒折から石和までの間を名残を惜しんで下さった高等科児童諸君、皆さんの御心持に重ねてお礼申上げます。たった一年きりで思ひ通りの計画が実行出来す残念ですが、この目茶苦茶にたゝきのめされた苦し

見、見

拝啓、拝啓

か、加

愚生、愚生（グセイ）わたくし
図、図
轉任、轉任
轉た、うたた　いよいよ甚だ
慨嘆　ガイタン　なげくこと
ちこと、さす

みの下から必ず力強く立上り、来る八月の暑中休暇をまる一月利用して約束の文集を天野の血と涙で作り上げたいと思ってゐます。　お家の人達にもお忘れなくよろしくとね。

見おとりに答へて　（二）　社　叔

拝啓

暖氣日にかはり軟風梢を訪れて百花將に開かんとせる折
不幸にして　愚生図らずも轉任の悲運に遭ひ轉た慨嘆に
念に堪え申さず候

今にして過去一ヶ年間御校在職中の自己をかへりみ候へば

放縦無頼 ホウジュウブライ わがまゝで礼に欠く
制する、制する おさへつける
識らず シラズ
支障 シシャウ さしつかへ
慚愧 ザンキ はぢる
至、至
さはれ さはれ ではあるが
御庇護 ゴヒゴ かばひまもる たすけること
恙なく ツヽガナク
御薫陶 ゴクンタウ 人を善にみちびく
終生 シウセイ 一生
忘却 ボウキャク 忘れてしまふ
無為無能 無為無能
當日、當日
割きて サキテ

余りにも放縦無頼我意のまゝに振舞ひ候ふて自ら制する
ところを識らず、校長先生はじめ諸先生の意に反するもの
多々有之　ために教育上幾多の支障を招き候事を思ひ
浮べ今更ながら慚愧の至に存じ候
さはれその間数ならぬ身を陰に陽に御庇護下されし愚生
をして恙なく今日あらしめしは一重に諸先生方の御指導
御薫陶の賜と　三郎　膽に銘じ終生忘却仕るまじく候
殊に諸位に際しては無為無能何等つくすところなかりし
まゝにも、はからず愚生のため分に過ぎたる送別の宴を催され
且は又出発当日は貴重なる時間を割きて多数児童引

舊例 キュウレイ 舊例 昔からのしきたり
残、を
態々、態々 ワザ〳〵
一見、見
辱うす、カタジケナウ 有難く受ける
破格 ハカク きまりの外に出る、身分以上
恐懼 キョウク おそれ入ること
謝意、謝意 おれいのこゝろ
此の設、此の度
轉任 轉任
思、恩
致、致
油然、油然 ユウゼン 雲のしきりにわくさま。
難く、難く
當地、當地
梅花、梅花
櫻花、櫻花
せず、せず
老鶯、老鶯 アウ 春すぎてなくうぐひす
低迷 低迷
陰晦、陰晦 インクワイ くもりてくらいこと
曇天 曇天

率の下に舊例破りて態々驛までの御見送り残辱うし
身に余る破格の栄誉に唯々恐懼其の謝意を表すべき
辭に窮し居り候
生死離合は世の常とかや、されど此の度の轉任をきしか
思ひてあきらめんには余りに儚き心地の致し候ひて縁あ
らば、否、縁を求めて諸先生と相見えたき念油然として
止み難く候
六日当地に参り候へども山地春尚浅く梅花既に散りつゝ
して櫻花未だ綻びんとせず　老鶯時に来りて鳴くも暗
雲空に低迷し花曇ならぬ陰晦なる曇天に心和まず候
まゝ

去年　コゾ　去年
憂鬱　ユウウツ　氣がふさぐこと
晴れやらぬ　晴れやらず　晴れてしまはない
駑馬　ドバ　足ののろい馬
駿馬、駿馬　シュンメ　足早き馬
勝負、職員
精勵、精勵　一心にはげむこと
御校、御校
駸々乎　シンシンコ　馬の早く走るさま
彼岸、ヒガン　向ふ岸目的地
邁進、邁進マイシン　ひたすらすゝむ
常日比　ツネニゴロ
遊　遊
不順、不順　順をたがへる
御自愛、御自愛
御風聲、御風聲　評判　傳言
程　程
玉諸、玉諸

去年の事ども多く思ひ出されて何かなし憂鬱の雲晴れやらず候

駑馬を拔きて駿馬の速さを加へられし御校職員御一同様益々御勇健の中に御精勵御校御村教育のため延いては帝國教育事業のため駸々乎として日に月に彼岸に向ひて邁進遊ばされん事哉祈りつゝ常日比の御厚情に謝するの辞を兼ね斯くは御挨拶申し上げ候次第に御座候

時候不順の折柄一層の御自愛祈上候尚末筆ながら役場の小父様小母様にも宜しく御風聲の程願上候　頓首再拜

昭和八年四月十三日

南都留郡宝小学校内
天野三郎

玉諸小学校職員御一同様

武井馨　大正一〇・四・二五生　宝村大幡三一八　草花栽培園史を好む　希望農村生活　目下在学中
ま、に
色々、色々
此、の
卒業、卒業
御様子、御様子
毎々、毎日
学、學
戦、を
以、い
迷、れ
の、か
一度、一度
そ、す
教室、教室
運動場、運動場
此のころ、此のころ

小學の友におくる

高一　武井馨

若葉の萌え色々の花が咲きこぼるゝ春が訪れて参りましたね。君も御壮健まで日日の仕事にお勵き此事と思ひます。御卒業後の御様子祈がありましたらお知らせ下さい。僕は毎々元氣で学校へ通つて居ります。尋常六年戦卒業して直ぐ社會へ出て働いて居られる君と別れてからもう一月あまりもたつがまだ一度も會へないのが残念です。考へて見れば尋常一年から六年まで毎日々々同じ教室で学び同じ運動場であそんだ君のことをとても此のごろなつかしく思ひ出されてなりません。

粉出　精出し
身作　身体

小林信雄
大正一〇・八・二六生
宮村中澤蔵四一二
手工 國語 好む
希望 農業生活
目下在学中
返を　返す
羽復　拝復
平業　卒業
政　度
比　此

僕も高等科を卒業したら「君と同じやうな家の職業のために一心に働きたいと思って居ます。働く事は國家のためだ。

君、おたがひに一生懸命仕事に精出して立派な人間にならうではないか。　ではお身体をお大切に。　さようなら

入学祝に返を　　高一　小林信雄

羽復

御手紙のとほり尋常を卒業して此の度高等科へ入れたことは此の上もない幸福なことだと思ってゐます。

學校の先生にとっても父母にとっても、よろこばしい事であると

をす
帝け 本氣
勉強する 勉強する
か
他人事 他人事
思 思
座 座
戦争 戦争
日本軍人 日本軍人
以い
戦を
ちさ
作 体

思ひますが僕にとっては尚さら嬉しくてたまらない事です。

それだのに又元氣になって勉強するつもりです。

善之助さんは兵隊に行ってなのらしい、僕の事を他人事とも思ひまさないで、色々御心配下さいましてありがたう御座ゐます。

若し今度戦争でもありましたら、勇しい日本軍人として出征し大いにてから戦立てて下さい。　そして名譽ある兵士として家にかへって下さる事をお祈りしてゐます。

たとへ何のやうな事のありましても　家の方の事は決して心配しないで　お國のために力のかぎり働いて下さい。

では御身体　お大切に。

(46)

高部保
大正一〇・一〇・一七生
宝村三〇八番戸
讀方手工を好む
希望 商店員
目下在學中

奉公 奉公
卒、卒
よ、よ
やわ、谷村
が、が
分、分
擇、譯
さ、せ
も、も
間、間
自分、自分
れ、の
成、を
事、げ
ま、は

奉公先の友にあてる

高一 高部保

眞澤君、卒業してもう一月以上もたちましたね。

この四月別れる時はお互ひに元氣でしたがその後如何ですか。自分の家に居るよりずっとつらい事があるでせうね。私は谷村へ出る度に君の事を思ひ出して、會ひ度いとは思って居たが、どの辺に君の居る店があるのか分からないので、そのまゝになってしまって申譯ありません。

君は一日も早く一人前の人間になってお母さんを安心させ、自分もそれ家成立派について天下へ名をあげて下さい。私もそればかり祈って居ます。

ではお達者で、さようなら。

(5.6)

見高孝二
大正一〇・一一・二四生
宝村中津路五四一
生物を飼ふこと・算術を好む
希望 農村生活

変、變
様、様
よ、よ
喜、喜
事、け
度、す
母、無事
度、度
ち、ち
どれ、どの
足、り
蚕、蠶
忙、す
繁、繁

卒業を祝ふ手紙

高一 見高孝二

追々あたゝかくなって参りました。皆さまにはお変りありませんか。

御兄上様にはこの度よい成績にて商業學校を御卒業なされたとの事、誠にうれしい事だと私も陰ながらお喜び申上げます。そして又更に會社へお勤めになる事が出来たとか、重ね〴〵のお芽出度い事に、こちらでは一家一同どれ程喜んで居ることか分かりません。

家では蚕をはいてもうすぐ麦打です。とても忙しくて目が廻るやうな毎日です。猫の手でも使ひたいと母は言って居ります。もう農繁休暇になりました。田植もある、桑摘みもある。

色々 色々
仕 体
事 け
積 績 セキ
さい嵩 さま
以い

柴田 敬
大正一一・一・二八生
宮村二一大谷戸
養蚕、園藝を好む
希望、商店員
昭和一〇・五・二七高
二三中途退学
今南都管部吉
目的大田見頭申
由連方
御無沙汰致し
御無沙汰致し

色々の仕事で忙しくてなりませんが 身体だけは家中みんな
丈夫です。
どうぞ御兄上様には今後益々一心になって 會社でもよい成績
をお取り下さいませ。末筆ながら御姉上様にもよろしくお
傳へ下さいませ。
(5.26)

近況を報す

遠 柴田 敬

拝啓
久しくお手紙も差し上げず御無沙汰致して居りましたが
その後皆様にはお変りもありませんか お伺ひ申し上げ

僕は、ます
校、度
学校、學校
ます
に
市 け
以 い
さ さい
桜 櫻
花 花
級 級
卒 業

ます。僕は今度高等一年に入学して 今学校に通って居り
ます。
こちらは先日大雪が降りました。四月になって雪の降ったのは
めったにないのに、今年に限って珍しい事だと皆言って
居ます。家の者はそれでも皆元気に働いて
居ります。から御安心下さい。
桜の花はまだ開きませんが 梅の花は咲いて居ります。お友達も
みな一級づゝ進んだので にこにこしながら学校へ通って居ります。
厚兄さんは學校を卒業すると直ぐ、大幡組合の番頭にな
って つとめて居ます。最初なれない中は なかなかえらくてたまら

ないと言って居りましたが、直くなれてしまったらしく、この頃は
よろこんで働いて居ります。
だんだん暑くなりますので兄ちゃんも達者でお暮し下さい。
では近況お知らせまで。
敬具

慰問文

高一 小林有遠

兄さん、一筆申し上げます。
来る五月二十七日は海軍記念日ですね。定めし東京の方は
色々の催しがあって、大変にぎやかだと思ひますが、若しにぎや
かなところを見ましたなら是非お知らせ下さい。

働いて 働いて
暑 暑
暮し 暮し
さ せ

小林有遠
大正一一・三・八生
宮村中津森四四〇
作歌国史を好む
希望農村生活
目下在学中

慰 葉
記念 記念
东京 東京
を す
さい さい

出来るなら新ちゃんと一緒に横須賀に行って勇ましい軍艦
や演習か何か見て、その様子をお知らせ下さい。
初夏に近づいてもうぼつぼつ田植です。こちらの方も一同達者で
居ります。
どうぞ兄ちゃんも御身体を大切に
さようなら。
(5.26)

友に遠足の様子を知らせ

高一 安田成行

拝啓
大分あたたかになりました。
今恰度空も晴れて月の美しい夕、蛙の聲がかすかに
遠くきこえます。春の暖い此の季節、皆々様御一同にはおあ

一緒 一緒
横須賀 横須賀
行 行
れ の
見 見
様子 様子
せ せ
体 体

安田成行
大正一〇・五・二生
宮村大幡三七七四
野球算術を好む
希望 未定
目下在学中

を す
恰度 チョウド
遠 遠

せ　せ
等　等
至　至
い　い
野草　野草
開　開
と　と
秋　秋
結　結
花　花
を　を
見　見
勉強　勉強
思　思
暑　暑
よい　よい
遠足　遠足
は　は
登　登
實　實

はりありませんでせうね。　僕等家内一同も至って壮健に働いて居ります。

野草は花を今開かうとして居ます。開いた花は一生懸命に實を結ばうとして居ります。秋、實を結ぶために苦労してゐる此の花の力を見て僕等も一心に勉強しなければならないと思ひます。四月、五月、六月はそんなに暑くもなし、勉強にはとてもよい月ですからね。

「君等は何處の方へ遠足にゆきましたの。僕達は村の西に聳えてゐる三峠へ去る十二日に登りました。頂上へ登った光景、實によかったね。　四方を見下す心地、何ともいへ

氣持ちさ　氣持よさ
富　富
横　横
見　見
乘　乗
色々　色々

ない氣持ちさ。　高くそびゆる富士山の下に悠々と横たはる河口湖、はるか向ふに見ゆる山中湖、そして西湖、本栖湖。日本一の山と言はれる富士は、雲に包まれて余りよく見えなかったのが残念でした。

漫々と水をたたへた河口湖へ着いた時には誰も彼もよろこんだね。　僕等はボートにのせられて鵜の島へ向ったが、この島は僕等のいふ辨天島で、昔の日本武尊について何か傳説が残って居るさうです。　「君はボートか船に乗った事がありますか。　僕は始めてだったが大変氣持のよいものですね。

色々書きたい事がありますが余り長くなりますのでこの辺

作　体

市川元治
大正一〇・八・二五生
宝村大幡一四九五
体操を好む
希望 農村生活
昭和九・七・三一高
一年で退学し今
家にあり農業

様　様

季節、季節
すっかり

暮　暮

致　致

ま　に

北　の

見、見

で止めます。

どうぞお身体を大切にして下さい。　さようなら。

(5.19)

遠足の様子を兄に報せ

中退　市川元治

拝啓

冬の季節もすっかり過ぎ去って、草木ともに青々と茂る気持のよい春となりました

兄さんには何時もお達者の事でせうね。こちらも一同無事に暮して居りますから他事ながら御休心下さい。　僕等は今月十二日に春の遠足を致しましたが、實にたのしい遠足でした。　方面は三峠、その頂上に登って見下した時は河口湖

本当、本當

喜、喜

あ、た

以い

モす

軽々　軽々

愉快、愉快

一齊 イッセイ
一度にそろって

北　の

あ　あ

程、程

西湖等の湖が漫々として見えたので、僕等は本当に汗の賜たと思って喜びました。　実にその眺めは壮観でした。又七曲りで有名な國道八號線を下りましたが随分長いみちでもね。　河口湖へ行って軽々と浮んだ舟に乗った時は、実に愉快な気分で楽しいと思ひました。　そして皆一齊に舟の中で色々の歌をうたった事れたのしさ面白さは、全く一通ではありませんでした。「かんこう」といふ僕等の乗った舟は物すごい程早くて、前を行く「きりしま」を追ひ抜く位でした。　舟が鵜の島へ着いたので辯天さんへおまゐりしてから又舟で船津まで一息に走りつきましたがその時は雨のしよ

雨 雨
車 車
と と
草 草
見 見
本當 本當
嬉 嬉
致 致
居りました ました
に に
様子 様子
一草 一草

ほしよほ降って居りました。
雨の中殊に吉田驛まで歩いて、電車に乗ってから一安心して
窓で外を見ると、附近の田は一面にれんげ草の花でもえ立ち
とても美しく見えました。
一日中本当におもしろく遠足して嬉しかったので、その様子
をお知らせ致しました。
さようなら　(5.21)

兄に遠足の様子を報す　高一　見高孝二

兄上様　あたたかくなりましたね。
一木一草何を見てものびのびとして如何にも春らしくなりま

あ あ
致 致
季 季
登 登
景色 景色
南 南
見 見
本栖 本栖
は は
関 トキ

した。兄上様には何の変りもありませんか。お伺ひ致し
ます。　僕も元氣で学校へ通って居ります。　僕等は
去る十二日三峠へ春季遠足をしました。
頂上に登った時の景色はまるで夢のやうでした。広々と
した山の原で夏蜜柑をころはしたりして遊びました。どち
らを向いても山ばかり、ただ南西方にかすかに見ゆる本栖
湖、これも湖だとはっきり分る西湖、目下に大きく見えるのが
河口湖。　思はずおこる関の聲。
下って國道八號線より河口村へ出て、河口の小学校で一休みし
て後河口湖へ行きました。　そしてボートに乗った時の嬉し

欠

ちと　さ
迄しあ　ました
土産物　ミヤゲモノ
棃本宮様　梨本宮様
の　か
あ　な
関係　關係
阿るぷと　あると
さ迄　され
程　程
我　を
お　谷

さて何よりでした。ボートは走る〳〵間もなく鵜の島へつきました。鵜の島で土産物を買ひボートに乗って船津へ急ぐ。途中梨本宮様の別荘が見えました。船津へ着いて、ボートから下りた時は皆がつかりしました。

船津から吉田へ歩く。途中軍用自動車に行き會ひました。又左手に大きな枯れた松がありましたが前にお父さんがその松は武田信玄に関係があると話されました。

上吉田について電車が一時間程待つ間に、茂利君がおとりに来てくれました。電車に乗って二郎君と二人で窓の外を眺めて居る中に谷村へついてそれから川棚部落を通

れの
辨当　辨当（ベントウ）
まり
故度
いと
思思
御身体
御身体

高部春子
大正一〇・四・一五生
宝村大嶺二三四六
裁縫國史が好き
希望　裁縫で

舟へ乗ったもやであから、嬉しくてたまらなかったで向ふから流れて来るお辨当の空箱を、のこへちらして居ました。船津から吉田まで歩いて電車に乗る、谷村驛まで来々川棚残越して家へかへりましたが、今度は君と二人でいつの登って見たいものと思っております。よい日を選んで如何ですか。では追々暑さに向ひますがおて御身体を御大切に。

和一

(519)

卒業した友へあたへる

高一　高部春子

野山の、のきみに蔽はれて如何にも春らしいと思ふ間に、

欠

身を立てたい 早く在學中
と は 穗 貴女 巣立つ 續 教室 前 野 卒

もう初夏を迎へやうとして居ます。すくすくと延びた若葉も一日毎に緑を増し、田畠に搖れなびく麥は今将に穗が出やうとして居ます。

貴女のこのなつかしい学校、思出深い校門を巣立ってから、もう一月あまりの日が過ぎ去ってしまひました。私は引き續いて高等科へ入学しましたの。生徒の總數が五十六人もあるし、教室は普通の教室より狭いものですから、窮屈で机の前も後も通り歩きが苦しい位です。受持の先生は天野先生です。先生は今の高等二年生や、もう卒業してしまった人たちの文集をお作りになる

高等 の 畫 れ 氣 程 貴 入學 遊 様子 思 色々 せ い す さま

ので、大へん忙しさうに毎日働いて居られます。高等一・二年の複式學級を教へながら、とても大きな文集の計畫を立てられて居る先生のお忙しさは、側で見て居ても お氣の毒になる程です。

貴女の入学遊ばされた女學校は如何ですか。もうすっかりお慣れになってしまって、心細さもなくなられた事と思ひます。何時か学校へお遊びに来て、色々学校の御様子など お聞かせ下さいませ。

今日はこれで失礼します。

ふみ江さまにもよろしくね。

さようなら。

(5.6)

武井育代
大正一〇・四・一八生
宮村大塔二一三五
家畜の世話讀方を好む
希望未定
目下在學中

卒 業
ま に
の 四
あ た
れ の
ぃ い
驚 驚
ぉ は
運動 運動
勉強 勉強
遊 遊
さい さい
暮 暮

卒業の一文

高一 武井育代

竹子さん

もうすっかりたのしい春になりましたね。私の四月一日に高等科へ入学してから もう一月以上たってしまひました。月日のたつれ早いのに今更ながら驚かされて居ります。今私達は學校のあの廣い運動場で飛んだりはねたり教室で一心に勉強したりして居ます。竹子さんもさぞお忙しい事でせうが、お暇が出たらお遊びに来て下さいね。みんなでおもしろいお話でもしてたのしい一日を過したいと思ひます。では、いつもお元氣でお暮し下さいね。(5.6)

渡辺みつ子
大正一〇・五・二生
宮村下大塔一四八
讀書綴方を好む
希望未定
目下在學中

喧嘩 ケンクワ
も は
室 室
卒業 ま に
残 き
思 思
の か
あ た

喧嘩したお友をなつかしんで

高一 渡辺みつ子

霞につつまれた空、すがすがしい緑のかぜ、みずみずしい若葉のかほり、皆春です。私達はこの三月、今まで同じ教室で學んだ級の人たちと別れ〳〵になってからもう二月もたちました。

朝子様、あなたとは喧嘩をした事もありましたっけね。それなのに今は言葉を交す事も出来ず、唯思ひ出の卒業式の時の事ばかりです。

實社會へ乗り出したあなた、未知の人々ばかり居るところでもまれてゐるあなた、一生懸命事務まつ

く　て
さい　さい

宮下よね子
大正一〇・七・一二生
宮前金井三四〇
栽培を好む
希望家事手傳
昭和九・八・三一高
二年進学
申譯　申譯
ゑ　ず
の　か
勉　勉
城　を
外　い
本　本
殺　朝
さ　さ
桜　櫻
ひ　か

とめて下さいね。　　のしこ。　(5.6)

春になって友におくる　　申達　宮下よね子

拝啓　御無沙汰はいたしてゐて申譯ありません。たか子さんも御丈夫で学校に通ってゐる事でせうね。私も達者で高等科へ通ってゐます。入学してから一月あまりたちますが、まだしつかりした勉強は出来ません。それでも先生の教へ城よくきいて本氣になるつもりです。こちらは今ひばりが毎殺麦畠の上でさえづってゐます。もう桜の花も散ってしまひましたが、私達は遠足の近

勉強　勉強
思　思
わ　は
致　致
さ　さ

前田ヒサ子
大正一〇・八・九生
宮村大幡五八一
読書算術を
好む
音楽、他出して
働きたい
目下在學中
桜　櫻
色　色
空　と
を　す

つきましたので、毎日にこにこ顔で勉強をして居ります。いろいろの事をそれからそれへ考へてゐるとたか子さんの事がなつかしく思われてなりません。もっと書きたい事がありますが、又此の次に致します。

さようなら　(5.8)

別れた友へ近況を知らす　　高一　前田ヒサ子

桜の花も散りのすみにかゝるお空の下に、木々の緑の色つき初めるのを見ると、私達のこゝろに何となく元氣のわき出て来るやうです。

卒　卒
經って　經って
勉　勉
思　思
叱言　コゴト
却　け
よい　よい
變　變
に　に
福　福
は　は

卒業してからもう一月あまり經ってしまひました。

照子さんはその後お變りもなく御勉強のことと思ひます。　私も元氣です。　先生にも時々お叱言を頂きますが、それが却って自分のよい人間になれるのだと思ひ、そして又それがよい思出の一つにもなると考へるとたのしくてたまりません。

今年高等科へ入學した私達は大變にぎやかです。みんな一人なし幸福です。　高等になって學科も殖えました。お外のものもえらい事だらけです。　複式なので勉強はすきのないやうなやり方なので、ちょっともうっかりしては居ら

愛國貯金　愛國貯金
は　は
勵　勵
の　の
旅行費積立　旅行費積立
若葉　葉
今度　今度
い　い

堀内富子
大正一〇・八・二〇生
宮村大塩四三九
編物国史を好む
希望裁縫
目下在学中
た　た
さ　さ
甦　ヨミガヘル

れません。　經濟自治會費も愛國貯金も月々やるやうにしてゐます。　愛國貯金は貯金獎勵の意味ではじめたもので主として旅行費積立です。　さわやかな五月、　若葉のお山、　今度の日曜日ごろ二人で山登りでもして　あなたの方の學校のお話でも聞きたいと思って居ります。　　さようなら

入學を友に知らす　　高一　堀内富子

春のおそいこの山里にも漸く春の訪れて參りました。
長い冬のねむりから　何時しか眼をさましてよみがへって来た千草が

野 野
さゝ させ
れ の
ね は
囀 囀 さえづり
籬根 リコン 垣根の根元
無事 無事
私 私
本校 本校
あ た

青々と芽を出して野山を美装させました。あちこちに咲きれ梅が、のぼり小川の水もぬるみ、そこには藤の蔓が水々しく芽ぐんで居ます。そうして毎日の暖かな青空に小鳥は囀り、小犬は籬根にねむって、人間は借金のあるを忘れ花見に浮かれるといふのどかな春です。

此の時菊子さまには何のお変りもお座いませんか。私達一同皆無事です。貴女のそちらへいらっしゃる時、家に貞ちゃんはまだ生れたばかりでしたが、今では大きくなってもう笑ふやうになりました。私も四月一日から本校の高等科へ入学しました。妹の米ちゃんも尋常一年へ上りました。私達の受持ち

ね は
志 し よい
け 思 思
連 ツレ
さ さ
以 い
阿 あ
残 を
れ お
佐藤ヨシ子 大正一〇・八・二六生 [illegible]
希望 裁縫
御無沙汰 [illegible]
や け と

先生は天野先生とても厳格な先生です。私達は此の厳格な先生の下に大いに勉強して良い成績を上げたいと思って居ます。私の連は友達のゆき江さんが居りますので二人で仲よく一日も欠かさないで通ひたい考へでゐます。

菊子様も本氣になって働いて下さい。

あなたの為に健康を御祈りして居ります。　さやうなら。

友におくる　高一　佐藤ヨシ子

長い間御無沙汰して済みません。もっと早く御手紙差上げやうと思ひながら仕事に追はれてついおそくなってしまひま

ゐた　すた
ミ　よ
貴女　貴女（アナタ）
以　い
あん心　安心
れ　の
會　會
私　私
多　た
变　變
也　も
ま　は
福　福
に　す
お身体　身体

しね。悪しからず思召し下さいませ。
気候の大変あたゝかくなり住みよくなって参りましたね。
貴女は何のおかはりも無く、活社會の人となって一生懸命に
働いて居られる事で御座いませう。私も毎日たのしく元氣で
勉強をして居りますから御安心下さい。私達の受持の
先生は御承知の天野先生です。
あなたも社會の人となり私の高等科へ入学してからもう一月
以上になりました。お互ひに何の變りもなく自分の仕事
に精出して働く事の出来るのはこの上ない幸福だと思ひます。
富子さん、お身体を大切にして懸命に努力して立派な人に

さよ　さよ

安田孝子
大正一〇・一一・四生
宮村一一四番戸
讀書国史を好む
希望 未定
目下在学中

よ　に
思　思
お　は
空　と
せ　す
お　は
の　か

なって下さいませ。お祈りしております。とみ子さんへ
(5.6)

卒業した友へ

高一　安田孝子

御免下さい。
四月になったばかりだと思ってゐる中にもう今日は五月六日。
草や木の若葉の今世の中へ出ようとしてさかんに活動し
て居ります。
とり子さんはお卒業以来一生懸命家業に手傳ってゐらっし
やる事と思ひます。私もはじめて高等科へ入學した時には、
學科のとてもむづかしくてつとまらないやうに思ひましたが、今

多 た
讀方 讀方
今度 今度
課 課
者 は
年 け
生 れ
自習 自習
頂く 頂
勉強 勉強
せん さい
貴女 と
可 か

はもうなれたせいか大分わかつて参りました。
学科の中讀方は今度第九課へ、算術は十三頁へ進みました。私達の級は高等一二年が同じ教室で勉強しなければならないので、一年の方が自習して居る間に二年生が先生に教へて頂くといふ風です。讀方や算術の時間には、休時間まで勉強してしまふ事が決して珍しくありません。
何よりても私は元氣で通學して居りますから御心配下さいますな。
尋常科を卒業してからまだ貴女と一回しかお會ひしませんね。いつれその中にお目にかゝつてゆつくりおはなししたい

ます と
体 体
織田ふさ恵
大正一〇・一・一二生
宮村金井三九七
裁縫を好む
希望 家事手傳
目下在学中
れ あ
よ よ
に に
は は
無 無
た た
き き
御様子 御様子

いますと思つて居ります。
ではお身体をお大事に
さようなら。(5.6)

懐く友へおくる
高一 織田ふさ恵

拝啓
いよく春になりました。
その後久子さんには何のお変りも無くお懐きの由安心いたしました。私も無事に学校へ通つて居ります故どうぞ御安心下さい。
この間のお手紙に依りますと久子さんは横畑で機織きしておらつしやるとのこと、此のころの御様子如何ですか。

ゆき　と
噂　ウハサ
だ　す
とす　す
を　は
等　等
学　學
凌ぎよい　凌ぎよい
さ　さ

柴田次子
大正一〇・一二・一四生
宮村大字四五六一
草花栽培算術を好む
希望他出しては
たらくこと
目下在学中

祭ぶ　葉

毎日々々　ゆきめ子さんと二人で久子さんの事をお噂して居りました。久子さんの學校でドッヂボールをする時の球のとり方などかうた事を話しながら学校へ来る事もあります。

これからしばらくは凌ぎよい時候ですから精々お勵み下さいね。　さよなら。

（ゆき）

祭ぶのさき文　―祭に招く―　高一　柴田次子

紀子様

随分な御無沙汰、お許し下さいませ。皆さまお変り御座居ませんか。お伺ひ申し上げます。おの御様で私方も無事で暮して居ります故他事ながら御安心下さいませ。

紀子様、例年の機神様の祭典が又今年も近づきました。お出で富子さんをもお誘ひして御一緒に是非お遊びに下さいませ。

よい御返事をお待ち申して居ります。

次子

帝　け
をす　す
の　か
誉　慕
ちさい　さい
々　今
為　た
孫　緒
遊　遊
に
まよ　よ

土屋賢子
大正一〇・一一・一六生
宮村大字四五七六
編物国史を好む
希望裁縫家
目下在学中

祭の記　祭かき
日和　日和

祭ぶの記文　―友を招く―　高一　土屋賢子

拝啓　いよいよ春日和のうららかな空のつゞいてのどかのよ
なって参りました。

さゞ さま　變 變　本 本　私 私　ます す　よし よし　のか かけ　よい よい

岩村ゆき江　大正一〇・一・二九生　串村大谷二九一六　作歌読方を好む　希望 何か職業につきたい　目下在学中

皆さま お変り此御座いませんか。

例年の通り本年も来る四月十五日 私達の村の機神様のお祭が行はれますので 皆さん お揃ひで御出で下さい。丁度 桜も気候も申分のない時です。是非とも お出で下さるやう お待ち申して居ります。

兄の入学を報ず　高一 岩村ゆき江

お兄様

もう四月を迎へてから 今日で六日たってしまひました。これから五月 六月と だんだん よい時候に向って参りますね。

ます す　桜の花 櫻の花　あった た　には は　やうと と　お前 かけ　私 私

安田ワカヨ　大正一一・五・二一生　串村二一〇番戸　読方算術を好む　希望 工場で働く　目下在学中　致 致

お兄様のゐらっしゃる お家の方は様はとても親切な方だとか、お兄様もどんなにか御満足の事と思ひます。その後如何お暮らしの事やら お知らせ下さい。

こちらはもう 桜の花や 桃などが 美しく 咲き出しました。

四月一日に私も 小学校の 高等科へ 入学しました。これから私は 誠心を以て 一心に 勉強しやうと 決心しました。お前から 私の成功を お祈り下さい。

では お知らせまで (4.6)

なつかしい 友へ　高一 安田ワカヨ

富代さん 久しく御無沙汰致しまして 誠にすみません。

今日もお朝から雪が降って居ります。此の雪をあなたも見ながら、色々の事を考へて居るのではありませんか。
富代さん常に丈夫で毎日働いて居りますか。私も達者で今度高等科へ入学して通ってゐます。
こちらは梅の花は満開を過ぎて、さくら花が将に咲き出さうとして居ます。この花のやうにあなたも私もこの一年我たのしくおくりませうね。
ではお身体を常に大切に又お便り致します。

(4.6)

園田華都子　大正一〇、一二、六生　家村大字二九八　草花栽培　修身

師に遠足の様子を報す　高一　園田華都子

おなつかしい早川先生　お変りありませんか。
いよいよ初夏となり　若葉の光、野一面に晴々しく流るゝ如き鳥のこゑ。朝起きて青々とした緑の葉を見る程たのしい事はありません。もう三峰のみどりの草木も目のさめるばかりに美しくなりました。丁度遠足の好季節でしたね。
此の月の十二日　私達もあの高くそびえる三峰へ登りました。
三峰へ行く途中は道のけはしくてつらいと思ひましたが、あれ美しい山とり〴〵の新緑、小鳥のさえづる銀鈴のやうな音が長く〳〵続くのをきくやうにとても嬉しくなってしまひました。

頂　頂
涼　深
見　見
疲れ　疲れ
登　登
我　我
帯は　けは
渡　渡
さ　さ
に　に

頂上へ近くなるに從って霧の深くなり二三間向ふはもうみえない位でした。　みんなはすっかり疲れて足を引きずり引きずり登りましたので、頂上のみえるを一護につの見たのも忘れてしまって、我先にと飛んで行きました。はるか目の下に青々とした湖のみえた時も、待ちに待って居ただ帯にみんな跳上ってきっかりとわこひました。

頂上で晝飯を食べてから河口湖へ下りました。　湖をボートで渡りましたが、舟が岸を離れて青々とした湖上を水を切りながら進んで行くと、先生が「向ふにみえる島が鵜の島だ」と敎へて下さいました。　舟から下りて鵜の島に上

た　た
岸　岸
め　め
私　私
行　行
思　思
本当　本當
同　同
様子　様子

りましたが、青々と生え茂った木がお實にきれいでした。あの湖の水のさぶんさぶんと岸を洗ってゆくのを眺めながら、私は先生と此の島へ旅行に行った時の事を思ひ出しました。

あの時は本当にたのしい旅行でしたね。先生も今ごろは安都の小學校で一心に敎へてゐらっしゃる事でせう。　カラサン姿の子とも達がどんなに可愛い事やら。

私達の學校にゐらっしゃった時と同じやうに可愛い子とも達を親切に敎へてやって下さいね。

遠足の様子をお知らせまで　　さよなら

(5.20)

若蕊ふのさゝやき

市川きく
大正一〇・九・九生
室村二七四番戸
手藝國史を愛
希望 職業
目下在學中

蕊ふ 葉
節 け
の か
お姉 さま
ね は
と よ
私 私
お出ましすれば
昨日 明日
に す

蕊ふのきゝ文 ―来訪を促す―

高一 市川きく

久しくお手紙差上げないで今日やうやうのきゝ初めました。

お姉さま、先日あこちらへいらつしやるとの御たより下さつたのよ とう遊はしましたの。私毎日々々「今日の何時まで出發遊ばされ、昨日の何時までこちらへ着之節れと」など、そんな事ばかり考へて居りましたわ。

お姉さま、あんまりきくを心配させないで一日も早くお出で下さいませ。お待ちして居りますわ。

のぶこ。

ピチ〳〵と若鮎のはねる七月。
綿雲は空に浮び、こぼれるやうな蟬の鳴聲が天地の間に満ちみちる。
長い蟄居の生活から開放されて精一杯に歌ふことを、而鳴くことを許された「日ぐらし」に誘はれて、子ども達も日ねもすを山野で遊び暮す日が多い。青葉若葉のかげに蟬を求めて樂しんだ幼き日の記憶を、彼等は恐らく其の生を終るまで忘れることは出来ないだらう。
今は氣附かずとも、やがては彼等の耳朶に「幼かりし日」をはつきりと物語って呉れるだらう若葉のさゝやきに心から感謝の意を捧げねはならぬと思ふべき日も来らんものを。
十時の陽光を浴びて白く輝く若葉に對して降り注く日ぐらしの聲をきゝながら、私は私のたのしかりし夢の繪巻を操りひろげて、今限りなき追憶にふける。
山國の若葉の香をなつかしんで今年も又若鮎がピチ〳〵と桂川を遡って来たといふ。

秋叔

レ　レ

峰尾定雄
大正九・七・四生
宮村大倉五五〇
家畜飼育図
画を好む
希望會社員
今南都留郡明見村向原、岩村商店居住

る　た
愛沙汰無沙汰
今日　今日
平凡　本當
もす
とよ

姉よ近況を報せ

亜　峰尾定雄

姉さん、このころは一層暑くなりましたね。僕久しく御無沙汰してすみません。又六日降りつゞいた雨が今日からりと晴れて本當よくなったと母が言ひました。蚕に桑をやるのに雨が降るとそれが出来ませんからね。
其の後何のおかはりもありませんか。こちらは家内一同無事ですから御安心下さい。もう家では繭をかき初めました。豫想より多くとれたやうです。
吉田の竹さんの姉さんよろしくと言ひました。それから長い間妹の病んで居ましたが此のころは大分よくなって

以　い
時節柄　時節柄
草々　草々
渡辺永喜
大正九・一二・一生
宮村大增一五五番
野球地理を好む
希望会社員
今八王子市八幡町西川商店内居住
暑　暑
稲　稲
宮村　寶村
も　す
変　變
無事　無事
わ　は
も　す

学校へ通つて居りますから御安心下さい。

時節柄お身体を大切に　草々

(9.8)

暑あき文

高二　渡辺永喜

随分暑くなりましたね。

青田の稲もすくすく延びて四方の山々のみどりが深まつて来ました。宮村もすつかり夏です。

君達の御一家別段のお変りも御座いませんか。こちらも一同そろつて無事です。僕等の受持の先生も君達の知つて居らるゝ通り天野先生です。今の高等科は高等

学　學
進　進
も　は
前田勲
大正一〇・五・一生
宮村大增一八六
農業算術を好む
希望農村生活
昭和一〇・一二・四高一より中退し今家に在り
弘　弘
以　い
此　の
番　番
は　す
病氣　病氣

一年への入学生が多かつたので六十人近くになりました。

諸集は九月ころまでには出来上るとの事です。

右簡単にお知らせまで

友に農繁期の様子を報ず

中退　前田勲

隆弘君、このころの忙がしさは一通りでないね。僕の家では今忙しいの真盛りです。何處の家でも今が一番忙しいやうです。

家では田植を昨日終りましたがこれから麦打が三日ばかりつゞきます。お母さんの病氣はなかなか癒らないで

残 を　迄 と
色 色
見 見
宗程 餘程
市 け
〻 て
者 は
多 た
御地 御地
様子 様子
見 見
下さい 下さい

もりを飲むと 元氣には なるでせうが 少し何かあると
顔色がわるく なって 氣持が悪いやうに見えますね。
特に天氣の悪い時には 餘程 氣をつけて居ますが と
うかすると 息切れなど ある事が あります。
そのお母さんでさへ 働かなければ ならない程 今忙しい
のです。

君の方は如何ですか。麥の刈取がすみましたか。何しろ
今年は 天候が余りよくなかったので 麥刈もおそくな
って それだけ仕事も 忙しさが 増したわけです。
御地の様子も 折を見て お知らせ下さい。ではさようなら。

ま に
者 は
御礼 御礼
申 け
珍 珍
一家 一家
喜 喜
思 思
程 程
さ さ
秋 秋
凉 凉
單衣 ヒトヘ

おくり物に礼して

高二 渡辺永喜

先日は大へん結構な葡萄 たくさん お送り下さいまし
て何と御礼の申上げやうも御座いません。何しろこ
ちらでは葡萄はとても珍しい上に、お送り下さいました
御品の粒も味も見事なもので御座いましたので一家
一同早速大喜びで頂きました。
弟など自分の分を食へ終って尚 ものほしさうに立って
居る様など思はず家中大笑ひをした程です。
暑中のころは随分 暑さの激しかったが 立秋にな
ってから 次第に涼しく なって このころでは 朝夕 單衣一枚

寒い　寒い
ゞ　す
秋　秋
注意　注意
暮　暮
程　程
節　け

禿筆　トクヒツ　先のきれた筆
降りみ降らすみ　降ったり降らなかったり
田家　デンカ　田舎家　農家
本田　本田
耕鋤　コウジョ　たがやしうなふ
代掻　シロカキ

ては肌寒いので弟達は羽織を着だしして居ます。
秋の取入で愈々忙しくなって参りますが、折角御注意
あそばされてお達者でお暮しの程祈り上げます。
先づは取りあへず御礼まで。さようなら

前佐地村民一同の厚意に謝して　　秋　報

禿筆をとって一筆申し上げます。
降りみ降らすみの梅雨の候を迎へて田家愈々多事、そ
れ養蚕の後仕末だ、やれ麦の取入だ、苗代の管理もせ
ねはならぬ、本田の耕鋤代掻もせねはならぬ、田植もし、

茲　コヽ、
季節　季節
さゝ　さ
察　察
致　致
稀　稀マレ　めづらしい
先般　先般　せんだってさきごろ
雹　雹ヒョウ
蒙　蒙コウムル
衷心　チュウシン
喜　喜
丁寧　テイネイ
情　情
結晶　結晶
有難　有難
致　致

畑作物の手入れ、水見廻りも、と一年中の仕事の大
半を茲に集めて猫の手さへも欲しい此の季節、定めし
眼が廻るやうな忙しさの中に、今日このごろをお過し
の事とお察し致して居ります。　でも近年稀な繭
の高値に先般雹害を蒙りました桑の損害も幾分
なりとも緩和出来る事を衷心お喜び申上げます。
扨今回は御丁寧にも御村皆様方の余りにも麗しい
御厚情の結晶として結構壮麗なる記念品の御恵
與に預り思ひも寄なき感激の中に昨十八日有難く拝
受致しました。今更ながら過去一ヶ年間御村小学

竭せ　ツクス
過　過
自己　ジコ　自分
思　思
自責　自責　自分で自分をせめる
慚愧　ザンキ　はぢる　はづかしい
若輩　ジャクハイ　未熟者
白面　ハクメン　経験乏しきこと
謗　ソシリ
武骨　ブコツ　無骨　無作法
拘らず　カカハラズ
情　情
庇護　ヒゴ　かばひまもる
致　致
恐懼　キョウク　恐れ入ること
ゟ　は
此度　度
勿論　勿論
銘　メイ　きざみこむこと

奉在職中　何等竭せところ無き儘に過して参りました
自己の生活を顧み、その罪浅からざるを思ひて　そゞろ自
責慚愧の念に堪えません。
未だ若輩、白面の一書生の謗りを免れぬ愚生故、且は
又生来の武骨も手傳ひまして皆さまの意に添はざる
点多々ありしにも拘らず、熱誠なる御同情と御後援
とに依り御庇護下され心から感謝致して居りました矢
先、かへって御記念に預り　唯々恐懼の外御座ゐません。
甚だあつかましくて恐れ入る申分では御座ゐますが此の
度の恩賜の品は、勿論　愚生心身に銘して終生の記念

宜　と
奉職　奉職
想起　想起　思ひおこす
よすが　よすが　たより
鞭ち　ムチウツ
懇情　コンジョウ　あついこゝろ
所存　ショゾン　かんがへ
鞭撻　ベンタツ　むちうちはげます
拝趨　ハイスウ　走りおもむく　参上する
忙殺　ボウサツ　非常に忙しいこと
非禮　ヒレイ　礼にそむくこと
何卒　何卒
寛容　カンヨウ　心を大きくしてゆるす
当地　當地
僻村　ヘキソン　片田舎

宜し、御村小学校奉職中の過去を想起すべき唯一の
よすがとも致し度く、又微力ではありますが駑馬
に鞭ち今後専心斯道に精励し以て御懇情の萬々
一にも報いたき所存で居りまする故、御見捨なく倍舊の
御愛顧御鞭撻を御願ひして止みません。
一々拝趨御礼申し上ぐべきでありまするが、職務上の事務
に忙殺されて居ることとて、非禮を顧みず書中を以て御挨
拶申し上げる次第で御座ゐます。何卒あしからず
御寛容の程願ひ上げます。　当地僻村では
ありますが　近く　三峰あり　富士五湖あり　四季折々の

眺望　眺望
程　程
避暑　避暑（ヒショ）
清遊　清遊（セイユウ）　卑しくないあそび　風流なあそび
純好　絶好（ゼッコウ）　すぐれてよい
逐日　逐日（チクジツ）　だんだん、一日一日と
も　は
折柄　折柄
自愛　自愛　自分を大切にする
山峡　やまかい　谷間
寒村　寒村（カンソン）　さびしい村
然るべく　然るべく　よいやうに
鶴声　鶴声（カクセイ）　鶴の声　鶴の音を傳へる　傳言
願　願
略儀　略儀（リャクギ）　りゃくしき

眺望飽く事なく　殊に岳麓一帯程なく國立公園に指定さるべき地ではあり、御地より避暑を兼ね一日此御清遊に純好の地と存じます故、お暇を見て是非一度御出の節下さるやう　お待ち申して居ります。

逐日暑氣愈々加わる折柄、一層御自愛益々御勇健の中に御諸兄の程、郡内山峡の一寒村にてお祈り致して居ります。　末筆にて恐れ入りますが御家族皆々様へ然るべく御鶴声下さいますやう御願ひ申し上げます。　先は略儀ながら右御礼まで　頓首

昭和八年六月十九日　郡内岩小学校　つ［illegible］野［illegible］記

此の
節　け
始　ま
ま　す
本格的　本格的　眞の價値あるもの
程　と
ま　には
病氣　病氣
注意　注意
だ　た
も　は
思
此　も
愉快　愉快
過　過
は　す

近況を師の許へ　　高一　安田成行

先生、一筆申し上げます。　時にも早夏も愈々本格的の暑さとなりましたね。　時には曇る時もあったり、雨の降る時もありますが、暑い晴天が幾日もつゞいて、うつかりする程病氣につねらはれる眞夏、先づ健康に注意する時だらうと僕は思って居ります。

先生は寳に居られた時のやうに元氣に愉快に此の夏を過して居られる事と思ひます。　僕も相かはらず元氣にこの夏休を過しました。

十九日に國中へ行つて親類のお友達とおもしろく遊びましたが、夜もねむれないやうな蒸し暑さには閉口しました。
先生のお出でになるところもこんなのかと思ひますと全くお察し申し上げます。
二十九日にひきあげて郷里へかへつて参りましたが、郷里は本當に暮しよくて毎日々々涼しい風が吹いて居ります。お暇を見て先生お遊びに如何ですか。ではお近況お知らせまで。(8.29)

はがき文

中退 白須廣宇

拝復 お手紙ありがたく拝見致しました。

暮 暮
さく さ
閉口 閉口(コウへイ)
困る、へこむ
おやと かと
思 思
察 察
申 け
本當 本當
涼 涼
居ります ます
見 見
遊 遊
如何 如何
ある は
ぜ せ
白須廣宇(ヒロシ)
大正一〇・一一・二〇生
宝村金井二三五
算術を好む
希望 機業家
昭和九・三・一 高一中退
家業に在り

立秋後も土用中よりも一層暑さの厳しくなりましたね。
貴君にはお達者との事何より結構なことだと心からお喜び申し上げます。僕は至つて健康で過して居りますから御安心下さい。
今後益々君の御健康ならん事をお祈りします。(8.13)

親愛なる姉に寄せ

高一 園田二郎

姉さん、いよいよ暑い土用も過ぎて、又涼しい季節が訪れて参りましたね。
先日はお葉書で姉さんにはお元氣でお働きになつて居

秋 秋
は は
か か
君 君
結構 結構
申 け
に す
至 至
す す
さい さい
園田二郎
大正一〇・八・二生
宝村大替三六〇
讀書國史を好む
希望未定
目下在學中
親愛 親愛
寄 寄
季節 季節
訪 た
の の
葉 葉

も　は
喜　喜
ゐ　た
無く　無く
過　過
傳　傳
迄　と
秋蠶　秋蠶
ぬ　い
も　す
兄　見
常　當
至　至

られる由。家の者はみんなこころから喜びました。こちらも
家中あの暑かつた土用を、何れも事も無く過して来
ました。僕は夏休中少しでも家の仕事を手傳はう
と、秋蠶を掃のないうちは田や畑の農事を手傳ひ、秋蠶
を掃くまで毎日々々汗びつしよりで桑摘みでした。
毎日朝早くから夜おそくまでお蠶の面倒を見てよく常
るやうにと一生懸命でした。口惜しい事には又繭は安さうで
すね。お蠶は三度目を並んだのや二度目位のもあるやう
です。今日もお蠶がとまつて居るのがあるのであまり忙しくは
ありません。父は農事にはつとめのやうです。兄も至つて元氣で

働　働
は　す
身体　身体
注意　注意
迄　と
勉強　勉強
經　經
も　は
ね　た
ね　お

柴田幸二郎
大正一〇・九・二生
宮村大字五〇八
職技作歌篇
を好む
希望農村生活
目下在學中
もす　す
隨分　隨分

毎日怠らず製材所へ行つて働いて居ります。
姉さんも十分お身体に御注意してお働き下さい。夏
休の終る迄僕達は第二學期の勉強です。月日の經つの
は早いものですね。もうお別れしてから半年たちましたね。
お正月にはおかへりになるでせう。姉さんのおかへりになるのを
家中たのしみにしてお待ちしてゐます。
さよなら
(8.18)

友を誘ふ
高一 柴田幸二郎

暑中御伺ひ申し上げます。
隨分暑い氣候になつたね。もう大抵全快したらうね。僕と

病は　等　葉　は　かけ　さ　家　を　体　に

ても心配したよ。盲腸炎は恐い病氣だからね。大事にし給へ。
病氣は凡てしまひの大切なんだ。すつかり全快させなければ又ぶり返すよ。
全快したら僕等の住む田舎へどうだね。新鮮な空氣の田舎！　青葉の山野の間に點々と散在する山間部落へ。　蟬は高く木のかげで鳴いてゐる。如何にも涼しさうだ。
君どうだね。僕等の一家は君の來るのを待つてゐるよ。
君の身体の強健になるためには田舎はいいね。　來たまへ。每日三々五々登る三峰登山者の、廣々とした田園の間をリユクサツクを背負つてゆく白い姿、たまらないね。
その若人のあこがれの山の麓の一村。　君來給へ、涼しいせきの起る田園が靜かにつづく農村へ。　僕等一家は喜んでお迎へする。
先は御案内まで。
失敬

と　す　家　喜　か　御案内　葉　は　手紙　お　ま　迎　變　喜

喜ぶのき文

高一　柴田敬

先日は御手紙有りがたう御座ゐました。
春を送つていよいよ暑い夏を迎へましたが兄さんには何の御變りも無く御丈夫との事　何よりの事とせお喜び申

申す 暮 安心　見 に　は 沢山　致　折柄 折柄　ぬ 様　意 意　葉　御無沙汰 致

し上げます。家の者も皆達者で暮して居ります故どうぞ御安心下さい。

兄さんおひまを見てこちらへも遊びに来て下さい。みんなで待って居ますから。それから今年は沢山の繭がなったので　みのったら　何時かお送り致しませう。

では追々暑さに向ふ折柄　お身体をこはさぬ様御注意下さい

さよなら

(5.31)

葉のき文

高一　前田和一

久しく御無沙汰致しました。

度 致　に 喜　思 す　れ　是非 是非　見 ます　遊 よ　ひ 色々　け

叔父さまのところでは　兄さんが今度　入営致しましたさうですね。誠に喜びに堪えない事で御座居ます。何時か一度お伺ひしたいと思って居りますが、蚕の方が大へん忙しくてそれも出来ません。あしからずお許し下さい。何卒蚕が上ってから　お伺ひ致します。

赤ちゃんも大きくなった事でせうね。是非　赤ちゃんのお顔を見たいと思って居ます。保一も大きくなった事でせうか。暇を見てこちらへも　赤ちゃんをつれて遊びによこして下さい。

では又近い中にお伺ひして色々お話し申し上げませう。御達者で。

さよなら

師　師
見舞　見舞
申しあげます　けます
方　方
如何　如何
後　後
此・の　の
此　此
返　返
御　た
本當　本當
紙　紙
私　私
情　情
更　更

今は遠き師を見舞ひて

寄稿　広瀬きくよ

暑中御見舞申し上げます。
先生 なか〱お暑うございますのね。先生の方は如何
でございますか。その後この暑さで御かはりございませんか。
此の間もわざ〱御返事ありがたうございました。
本当に先生は御手紙を拝見致しまして どんなに昔
のなつかしさ思ひ出されたか分りません。そして先生の私達
教子に對する愛情は如何にこまやかに そして深かったか
今更しみ〲と感ぜられます。
御手紙の中のあの幾つかのお歌に含まれてゐる先生の美

覚　覺
實　實
向　け
僅　僅
羨　羨
昨日　昨日
祭　祭
會　會
級　級
變　變
と　と
寄　寄

しいおこころに對し涙の出るやうなありがたさを覚えま
した。先生のそのおこころが實のお子さん達へも向けられ
て居られる事を思ふと 僅か半年しか教へて頂く事の出
来なかった私として どの位實のお子さん達が羨しいか
分りません。　お叱りにならないで下さい。
昨日お地藏様のお祭でした。阪本さんと一緒にお参
りに行きましたのとても賑やかでした。色々の人にたくさん會
ひました。　同級生もみんな娘さんみたいにきれいになって
居りましたけど みんなこころは變らないやうに話して居ります。
先生の作って下さった文集 クローヴァー の寄書へ「心」だけは

思	積	ま	校	皆	帶	の	を	知	れ	當					
思	績	れ	度	と	と	か	よ	知	の	番					

「一緒に」といった事を思ひ浮べます。
一學期はいつも成績が思ふやうに行きません。これもやっぱり勉強しないからでせう。仕方ありません。二學期の支度をしっかりしやうと思って居りますの。何としても暑くてやり切れません。
先生甲府へもお遊びよせうとお出て下さい。私はそちらよりこちらの方のよいとこはないかと思ひますの。でも先生は矢張御自分のお家へおかへりになった方がよいのかも知れませんわね。何故ってお母さんがお待ちかねして居らっしゃるんでせうもの。先生を一番可愛がって下さるお母さん

見	も	度	を	望	れ	な	喜	体	見舞	樣	會
見	も	度	を	望	れ	な	喜	体	見舞	樣	會

ですね。やっぱり考へてみると誰でも自分の家が一番よいところですわね。そしてお母さんが。
でも先生もう一度先生のこちらへお出て下さるのを私たちがどんなに希望して居るかって事をお忘れにならないで下さいませ。そしてそのねがひが達せられたときどんなに私達は喜び合ふ事でせう。
先生どうぞ御身体を御大切に、向暑の折からくれぐれも。(7.24)

懐しき友を見舞ふ　高一　武井育代

とし子様、二人とももう久しくお會ひしませんのね。

暮 暮　傍 傳　思 思　去 は　余 餘　帘 り　变 變　あ た　是非 是非　緒 緒　遊 遊　致 致

愈々真夏へ入って暑さのきびしくなって参りました折から如何お暮しで御座いますか。定めし一心に御勉強の傍お家の仕事へお手傳ひの事と思って居ります。お家でも秋蚕をしていらっしゃるでせう。もし余りお忙しいやうで御座居ますならお手傳ひに参りませうか。こんな事を申し上げても大変失礼だとは思ひますがあなただからこそ申し上げますもの。

その中お暇になりましたら是非姉さんと御一緒に御遊びにお出で下さいませ。お待ちして居ります。

終りに皆さまの御健康をお祈り致します。さようなら (8.7)

返 返　頼 頼　早速 早速　願 願　申し上げます　節 節　至急 至急　勝手 勝手　譯 譯　事情 事情　察 察　致 致　事 事　す　察 葉

物の返濟を依頼して

高一 渡辺みつ子

早速ながら母に代ってお願ひ申し上げます。此の間母のそちらへ参りました節申し上げましたその、至急入用故甚だ身勝手で恐れ入りますが二三日中に是非とも お届けして頂く譯には参りませんでせうか。勝手な事はかり申し上げて誠に申譯ありません。そちらの事情も充分お察し致して居りますのでほんとに致し方ありませんのでとうぞあしからずおきゝ届下さいませ。

かしこ

察しのきく文

高一 岩村みよ子

岩村みよ子
大正一〇・七・二五生
宮村一九二番戸
家畜飼育図史を好む
希望未定
目下在学中

申上げ あけ
折柄 折柄
様 様
働いて 働いて
手傳 手傳
た た
は は
時節柄 時節柄
身 身

高部清子
大正一〇・五・二〇生
宮村大字一四九
讀方綴方を好む

暑中お伺ひ申し上げます。
暑さきびしい折柄 姉上様には お変はりありませんか。
お伺ひ申し上げます。 私ども一同丈夫で働いて居ります
故御安心下さい。 私はこの夏一生懸命で家の仕事へお
手傳ひしましたので みよ子は小さいがなかなか仕事をする
って大へんほめられました。
姉さん、鎌倉は海のそばですから涼しいでせうね。 涼しさうなお
話をどっさり送って下さいませんか。 時節柄御身御大切に (9.8)

東京なる兄の下へ 高一 高部清子

目下在学中
希望裁縫
見舞 見舞
申上げます 申上げます
状 状
本當 本當
東京 東京
は は
暑 暑
た た
ほんと ほんと
御無沙汰 御無沙汰
致 致
様 様
働 働
と と
家 家
無事 無事
さい さい
秋 秋
朝 朝

暑中御見舞申し上げます。
お見舞状こんなにおくれてしまって本當にすみません。
東京は大変暑いと隣の小文さんのおっしゃいましたがほ
んとうでせうね。 その後御無沙汰ばかり致して居りま
したが、お兄様はきっと丈夫で働いていらっしゃる事と信
じて居りました。 家の方も一同無事で居りますから、ど
うぞ御安心下さいませ。

裏畠 こほろぎないてころころと
秋がのっさと教へてねるの私

もうこちらは朝夕涼しくなって夜などはこほろぎのころころ

層 層
体 体
注意 注意

前田まさ子
大正一〇・一〇・一三生
宮村中津森八五六
裁縫を好む
希望未定
昭和一〇・三・二八高市退
東京精技
今東京市本所区小梅町一六一七
佐野米太郎様方居住

久しく 久しく
申譯 申譯
は は
紙 紙
今度 今度
可愛 可愛
事 事
と と
経 経
是非 是非
行 行

と鳴きます。

日中の暑さも今しばらく故一層御身体に御注意下さい。

先は暑中御見舞まで　さようなら (8.20)

姉の出産を祝ひて

中退　前田まさ子

姉様　久しく御無沙汰致してゐて誠に申譯ありません。先日は御手紙ありがたう御座居ました。あれお手紙に依りますと今度可愛い女の赤ちゃんのお生れになったとの事まことにお芽出度うございます。私は飛上る程うれしくて是非姉さまのところへ行きたくてたまりませんでした。それで近いうちに行かうと思ひましたが、学校の方の都合で御座りますので行く事が出来ません。それでせめて赤ちゃんに着せるやうにと家で一生懸命になって着物を縫ってゐます。そして近い中に養蚕休暇のありますから　その時にその着物を持ってお伺ひするつもりです。どうぞそれまでお待ち下さい。

では姉様お身体を大切に　そして赤ちゃんをもお大切に

さようなら (6.10)

た た
に に
行 行
思 思
学校 學校
と と
す す
姉様 姉様
身体 身体
葉 葉

葉がきの文

高一　天野範久子

天野喜久子
大正一〇・一一・二一生
宮村大嶋二〇五九
織物図案を好み
和華他出て働く
目下在郷中

後 後
思 思
無沙汰 無沙汰
ござ と
申譯 申譯
御様子 御様子
本當 本當
に に
れ か
は す
過 過
さいませ さい
見 見
の節 かけ
遊 遊

高部政子
大正一〇・一二・一五生
宮村大嶋一四三
作歌国史を好み
希望 家事手傳

御免下さい。
毎日々々うっとうしい御天氣でこまりますね。その後は
思ひかけない御無沙汰してまことに申譯もありません。
きよ子さんのお家では皆様元氣でお働きの御様子本
當に何よりの事だと存じます。私も相かはらず元
氣で過して居ります故御安心下さいませ。
又お暇を見てときどきの節までもお遊びにいらっしゃいませんか
お待ちして居ります。
さようなら
(8.17)

暑中見舞に答へて

高一 高部政子

暑 暑
舞 舞
御 お
様 様
れ も
暮 暮
しい い
さ さ
居に ます
家 家
富士 富士
御登 お登
致 致
一度 一度
ね は
見 見
思 思
何時 何時
登 登
傳 傳
さいませ さい

琴子さん、御手紙ありがたう御座ゐました。
皆々様には御かはりもなくお暮しとの事何よりよろ
こばしい事でございます。私の家でも皆丈夫で居ますから
御安心下さい。
また四年生のあなたが富士山へお登りになったときいて家
内一同あなたのお足の強いのに感心致しました。私も一度
お登ってみたいと思って居りながら、またそれの許されませ
ん。その中何時か世を登りたい考へです。
皆々様によろしくお傳へ下さいませ。
さようなら
(8.10)

言葉

暑 暑
見舞 見舞
申 り
様 様
御無沙汰 御無沙汰
致 致
譯 と 譯
身体 身体
病 病
今年 今年
意 意
私 私
す す

慰めの文

高一 土屋賢子

暑中御見舞申し上げます。

すわ子様 久しく御無沙汰致しまして まことに申し譯ございません。 すわ子様には ほんとに お身体の お弱いとの事を 承って居りましたところ 春にも御病氣されたさうで ございましたね。 今年のやうな暑さ 充分御注意して下さい。 すわ子さんの御健康を 私も お祈りして居ります。

では さようなら。

(730)

近 近

兄に近況を報ず

高一 岩村ゆき江

は は
暑 暑
い い
私 私
漸 漸
を を
今年 今年
續 續
よ よ
の の
ち ち
昨 昨
胡瓜 きうり
傳 傳
す す
祭 祭

お兄様、此のころは大分暑くなりましたが お變りありませんか。 家の方では皆達者で働いて居ります。 父は毎日山へ行き、母も毎日お家の仕事をしてゐます。 私も漸く學校がお休みになりましたから、これから毎日お家の手傳ひを するつもりです。 今年は入梅から引續いて霧雨が降ってゐたので、父は久しく山の仕事を休んだから、このごろはよその人たちをたのんで 仕事をはかどらせて居ます。

昨日は妹と二人で胡瓜の害虫をとりました。 又母がそろそろお芋を俵に入れたいと言ってゐますから 私も手傳ひました。

もう直く觀音様のお祭で 例年通り青年の手踊の

帀	り
晩	晩
帰	歸
ゝ以	よい
わ	お
觀音様	觀音様
並	れ
戉	を
体	体
堂	と
紫ふ	菜
矢竹本江 大正二・一・二〇生 宮村四元番戸 手塚擴大至好出	
色	色
稲の穂	稲の穂
子	に
去	は
秋蚕	秋蚕

あるさうです。休暇の頂帯るなら一晩どまりでもよいのら帰るとよいかなど、母の言って居ります。もしおのへりになれるなら観音様のお祭の日におのへり下さい。それでは御返事を待って居ります。家の事は少しも心配なくお身体を大切にあつかって下さい。さようなら (8.8)

紫のき文 高一 矢竹本江

長らく御無沙汰いたしてすみません。もう山々の黄色みがついて稲の穂も垂れ初めて参りました。家の蚕も先にはいたのおすつのり繭になって乾燥してゐます。晩秋蚕も大分

満	ま
去	は
困	困
時節	時節
そ	す
見	見
遊	遊
如何	如何
様子	様子
そ	す
以	い
私	私
去	は
戉	を
高	た
帀	け
程	程

大きくなりました。近ころは二百十日のせいかしめくした天氣で困りますね。この時節は皆様は御丈夫ですか。蚕の終りましたら農業のひまを見てお遊びに如何ですか。

農繁期の様子を報す 高一 土屋賢子

花江さん。餘々六月となって忙しくなりましたね。あなたのお家もずゐぶん忙しいやうです。あなたも信州で稲出して働いて居る事で御座ゐませう。私達の方ではお蚕が始って、桑摘みをしたり桑上帯せしたり何所の家でも家の人数が帯ではやり切れない程です。

の　の
も　も
行　行
働　働
す　す
お蔭で　かけて　本當
は　は

幸ひ　私どもの家では　田植も蚕もしないものですか
ら　親類へ手傳ひに行ったりして忙しく働いて居
りました。
六月から七月へかけて　本當に目の廻るやうな仕事に
忙殺されて、手がなくて困り切って居りました。でも働く
事は幸福な事ですから　それはもう一生懸命
です。
あなたも健康で充分働いて下さい。御成功をお祈り
して居ります。　ではこれで失禮します。
さようなら

(7.14)

れ　れ
残　き
知　知
申　け
思　思
今　今
躊躇　チウショ　ためらふ　ぐづぐづする
此　此
迷惑　迷惑　メイワク
以外　以外
お　お
此　の
厚意　厚意
何年　何年
學校　學校
さけ

贈物の豫告に答へて　秋　敏

恐れ入った氣持でおたより拝讀させて頂きましたが何
故か私から御返事申し上げる事があつかましく思はれ
て今まで躊躇して居りました。
でも此のままで過す事はそれ以上の失禮や御迷惑
とをおかけする以外何の效果も無いといふ事に
考へ及んで「これこのまま」以限りで御座りますが、折角
此の御厚意、何年學校宛に」恥を忍んで御答
へ申し上げねばならぬ私をお察しなさってお許
し下さい。

お田植やら託児所と、それに先立つ麦刈と、およその
らしい行事は襲来、衷心お察し申し上げます。今
年は何方の農業のお受持をされて居られるやら、
水は乏しい、田植はくるしまされて参りました過去
の思出など辿ってなつかしまれてなりません。
愈々郷内の夏を迎へました。矢張岳麓は節は
って幾分盆地より涼しいのとも思はれます。
日々の生活は散策をしらべて教業のみは節くて、
片田舎の事とてつらきもの聞くもの無く、極めて
手持無沙汰の生活哉、めまぐるしい此のおかしさの生

話よりも以上に苦痛を感じて居ります。
避暑登山遊覧の季節を迎へて岳麓は漸く
活氣が漲って来たとか、加へて繭の高値で今
夏はちょっと息のつけさうだとか、そんな話題が谷村
や地元民の二三から、歐化主義全盛時代の西歐文明の如
く喧傳せられるの哉聞く外は「東日」と「山日」とを
唯一無二の旅伴として沈滞し切った人生行路を
黙々としてあてどもなくさまよひ續けて居るば
かりです。
井底の蛙聲大海の廣きを謳はず、否謳へず、畢

畢竟 ヒッキョウ つまり
比喩 ヒユ たとへ
御校 御校
様 様
定と
お事 すけ
明 明
和氣 和氣
靄々 アイアイ 集りたなびく
想ひ出 想ひ出
思 思
で と
様 様
案 案
あ あ
ますを ます
自愛 自愛
程 程
外 外
皆々様 皆々様
近 近

竟そんな比喩は漏れぬ生活かも知れません。お
笑ひなく。
御校職員御一同様頗る御勇健の中に御奮闘
此事を存し上申ます。
明朗な和氣靄々たる氣分の中に生活した過去
のこととりに想ひ出されて思はずも浮立つこころに御座
皆様の御身の上を御案じ申上げる宵も有りました。
梅雨の過ぎるを一段と増し暑さ、益々御自愛専一の
程お祈りして止みません。 外皆々様によろしくなに
御傳聲下さいませやう。 右御返事旁々近況御報告まで

紅葉の訪れ

秋風が吹く。

雲のたゞずまひにも、妙に白っちゃけた陽の光にも、沈み切った樹海の濃緑にも秋のあはれさは感ぜられる。まして蕭々たる秋風にチロ〳〵と途切れ途切れる虫の音は私たちの心へ沁み透らすには居ない。蚊のうなりがやせ果て、行く川の流れが細っても、コベルトブリュウの秋空に映えた赤トンボの羽音はさやかだ。

高原の秋、すゝきの穂波が靡き渡れば冷え〳〵とした感觸が秋をゆさぶる。時には煙雨しきりに山巓を洗ひ、或は強烈な陽光の直射が續けば、秋は物靜かに山頂から下界へと移り流れる。そして全山ことごとく紅衣を纏った三ヶ嶽の雪花姿に、毎日の如く私達のこころは強く牽かれる。

若しさひはひにさっと一陣の時雨が山を掠めて通り過ぎるなら、私達はどんなに多くの思出を呼び覺し、どんなに詩囊を肥す事が出来るたらう。

秋蔵

叔文を紅葉に招く

高二 鈴木忠重

叔文さん

果もなくつゞくコバルト色の空、天高く馬肥ゆる此秋です。一雨毎に周圍の山の色づきました。三峰もあの雄大な姿を紅紫で色どられて色深い青空にきっかりと浮かんでゐます。青、赤、黄、緑、さま〴〵の色の中で楓が一入目立ってきれいです。又松のみどりの鮮かな色もまことにきれいななのめです。雨上りの後など太陽が紅葉に映じて山の尖々かゞやいて眞紅の光を放ってゐる様は何とも言へない美しいことです

手書	楷書
东京	東京
见	見
い	い
思	思
を	を
紅葉	紅葉
见物	見物
一度	一度
さよ	さよ

山崎國廣
大正一〇・三・二五生　宮村全井　三八九
農産物栽培趣味を好む
希望　農村生活
今家に在り

手書	楷書
御無沙汰	御無沙汰
ばかり	ばかり
と	と
も	も
私	私
暮	暮
大変	大變
涼	涼
雪	雪

叔父さん、東京では三峰のやうな立派な紅葉もおそらく見る事が出来なかつたらうと思ひます故、一生の思出に折紙見て紅葉見物に一度お出でになりませんか。お待ちして居ります。

さよなら

紅葉に誘ふ

高二　山崎國廣

御無沙汰ばかりしてまことに申訳ありません。皆様にはお変りもなく御座居ませんか。私方一同達者で暮して居りますから御安心下さい。

このころ大変涼しくなりましたね。富士はもう雪で真白で

手書	楷書
葉	葉
た	た
登	登
に	に
の	の
紅葉	紅葉
は	は
見	見
ち	ち
す	す
か	か
地	地
紙	紙
に	に
かけ	かけ
さ	さ
ま	ま

す。天下の景勝地三峰の紅葉がとても美しくなりました。大菩薩から登つて頂上に立つては遠く甲府や伊豆方面まではるかに見えます。登る途中此の紅葉も里では見られぬものです。頂上から河口に下り、船津までモーターボートに乗つて、駅から自動車で僕の家へかへつて来るといいコースです。僕等の村から見た三峰もやはり紅葉できれいです。暮地から見る三峰は今赤黄色々の色で染めて居ます。此の手紙がつきましたなら来る二十八日の日曜にお出かけ下さい。お待ちして居ります。もしその日に雨が降りましたら又日をきめ直す事にしておきませう。

(1026)

の　か
家内中一同様
御家内御一同様
ゞ　と
を　す
私　私
ま　は
る　た
誤　致
比　の
の　か
居りました

旅行の様子を知らせる

高二　高橋　勲

拝啓　その後おかはりありませんか。家内中一同様御丈夫の事とぞんじて居ります。私も元気で通学して居りますから御安心下さい。

さて僕等の旅行は去る十一月四日五日両日間に行はれました。最初方面は御嶽昇仙峡で甲府市をも見学致しました。その日に夢の松島で作った和歌を下手ながら一首かきませう。

荒川や清きながれの松島は
松の根もとをこゝらしおそひぬ

その日は甲府へのへり米倉旅館へとまり居ました。

又　五
出表　出發
府　府
見晴　見晴
動　動
車　車
る　た
行　行
免　め
ぞ　せ
誤　致
を　す

渡辺みつ原
大正九・七・一八生
宝村中津森三七八
讀書　算術　を好む
希望　裁縫
今南都留郡谷村町回生堂病院
勤

次の日の五日は八時に宿を出表して甲府城へより四方を見晴しました。又動物園も見ました。午後五時十一分の汽車に乗り九時に家へつきましたがその時はとても安心しました

やれ／＼と家まついたら一安心
旅行のゆめを見てやねむらん。

くはしい事は又改めてお知らせ致します。

不一
(11.17)

叔母の様子を知らせる

高二　渡辺みつ原

叔母様　秋もかなり深くなって参りました。田舎は波打

紅葉	紅葉
秋	秋
ま	に
晴	晴
歯を	ます
北	の
時雨	時雨
の	か
思	思
色	色
葉	葉
さ	さ
様	様
度	度
寒	寒
注意	注意
峠	峠
誘	誘

つてゐる黄金の田園の刈入時です。一雨毎に一段々々と目立つて来る紅葉の秋です。鮮かに澄み渡つた碧空の下に燃えてる山々の紅葉、何となく晴々しい心で登山でもしたいといふ氣の湧き出て参ります。見るからにうるはしい山々の赤や黄っは、今にも時雨の一降りに洗ひ流されるのかと思ふやうな色つきです。一日々々とかはり行く紅葉の美しさ。

叔母様 是非一度見に参りませんか。

朝晩肌寒いこのごろ 風邪をひかぬやう御注意下さい。

(10.20)

三峠に誘ふ

高一 柴田幸二郎

秋	秋
れ	お
よ	に
紅葉狩	紅葉狩（もみぢがり）
北	の
と	よ
新	新
景	景
清風	清風
わ	は
の	か
紅葉	紅葉
色	色
小徑	コミチ

拝啓 秋冷の折から君にはかはりないだらうね。

時正に秋、山登り、紅葉狩、三峠はどうだね。秋！紅葉!!

何といつても忘るゝ事の出来ぬ秋よ。碧空の下、紅葉の林、新鮮な空氣の田舎、三峠の紅葉は何と言つても天下に名あるものだ。眞赤にそめたあの美麗さ、どうしても天下の景勝地だ。

紺碧の空に清風はささやき紅葉はそよぐ。絶壁にのこりたる紅葉 あゝあの色、紅！赤！黄！ 谷間に 岩間に 小徑に、行く人のこゝろをなぐさむ。

君！来給へよ 富士又湖を眞下に 紅葉を眺める三峠こそ

景色　景色
靈峯　レイホウ　神の山
思　思
よ　よ
小笠原定一　大正一〇・九・二五生　岩村大字一三八六　修身國史を好む　希望未定　目下在學中
葉　葉
秋　秋
ゐ　た
ま　に
よ　よ
紅葉　紅葉
残　を

實につくしがたい景色である。頭に雪をかむる靈峰富士を仰ぎ思ふさま三峰の紅葉をほめやうではないか。

待つてゐる。きつとだよ。さようなら。(10.27)

友に紅葉を知らせる文　高一　小笠原定一

だんだんと秋の深まりましたね。山は紅葉です。まるで君のこゝろと同じやうよ。一年の中どうしても秋のよいですね。町では紅葉の繪を見るか話でもしてたのしむより外ないでせう。僕達はその下に居て毎日紅葉のにほひ残のいで居ます。

葉　葉
残　を
々　て
贅澤　ゼイタク
町　町
様子　様子
の　か
ね　は
景　景
近　近
見　見
和　和
作　品

姉さんの僕に「あの美しい紅葉残折つて来て下さい」と言ふので僕の「姉さんこゝで見て居れは澤山だよ、折つて来るなんて贅澤だ」と言つた時丁度郵便屋さんが手紙を配達して呉れました。僕の急いで見ると町の叔父さんからの手紙で「秋の山の様子を知らせて下さい」といふ意味の事の書かれてありましたか、何といつても秋の紅葉を山へ来て見るよりよい方法はありませんね。さまざまの色が入り乱れたあの景色は手紙などでは決してお知らせする事は出来ません。

君近い中にこちらへ紅葉を見に来ませんか。紅葉でもみんなでよい和歌でも作りませんか。きつと立派な作品が出来ると

思　思
わ　お

亀田明
大正一二・一一・七生
宮村大塔一四八六
讀方を好む
希望農村生活
目下在学中

様　様
変　變
何より　何より
終　終
秋　秋
豊後梅　ブンゴウメ
菓　葉
蛾　を
種々　種々
き　す

思ひます。又その中にわたくしもかきましょう。
皆さまよろしく　さようなら。

近況を叔父に報ず　高一　亀田明

拝啓

その後叔父様には何のお変りもないとの事何より
ですね。僕も毎日元氣よく働いてゐます。
愈々夏も終りに近づいてあたりに秋らしい氣分がたゞよつて
参りました。裏の豊後梅の木も毎日何十枚といふ葉蛾
散らしてゐます。それでもまだ夏の名殘をおしんで、山で
は朝から晩まで種々のせみが口やかましく鳴いてゐます。

殘　を
き　す
昨日　昨日
蚕　蠶
此　此
此の　此の
本当　本當
思　思
よ　に
作　体
多　お
様　様
さん　さい
傳　傳

白い雲の浮んでゐる空殘赤トンボの群をなして八重十文字
よすーつすーつととんで居ます。
家でも昨日蚕の上りました。此のたのしい暑中休暇も
夢の此の間に過ぎて本当に短い氣がします。月日のたつの
は早いもので正月が過ぎたと思つてゐる中にもう後四ヶ月
でこの一年も過ぎてしまひます。僕も休暇中に大分身
作が黒くなりましたが、これだけ達者になつたのだと思ふ
とうれしくてたまりません。では叔父様もお身を御大切にお
働き下さい。
では近況お知らせまで。
末筆ながら皆さまにもよろしくお傳へ下さい。

(8.28)

後 復　ゐ た　麦 變　里 り　尚 ま　着 暑　驚 驚　去 は　而 雨　よ に　の か　え め　鉱毒 鑛毒

近況を報す

高一　小林有造

拝復　先日はわざく御たより下さいまして誠にありがたう御座いました。　こちらは今田植で大変忙しくなって参りました。

梅雨のあけて急に暑くなったのに驚いて居ます。六月中旬はよく降って居るので、七月もこんなに雨ばかり降って居るのかと心配をして居りましたところ、七月になると急に晴天がついたのでびっくりしてしまひました。そしてどの家でも田植をはじめましたが、こちらでは水の足りないので田植のおくれ、中でも中津森の人達は仕方なしに鉱毒

支 す　宮 と　致 致　様 様　麦 變　れ の　座 座　程 程　残 を

昭和九・一二・三〇高一を中退す
田中久吉
大正一〇・二・二一生
岩村高畑五一四八
今南部曽部岩村高畑の自宅に在り

紅葉 紅葉　残 を　昨 昨　程 程　さ す　れ の

の入った大川の水を入れてやっとすませたやうな譯です。

それでもこれで忙しさが一片付したので皆ほっと致しました。

そちらでも伯父様をはじめ皆様お變りもなく御丈夫とのこと、何よりの事で御座います。

尚一層の御健康の程を　お祈りして居ります。さよなら　(7.5)

紅葉を送る

中退　田中久吉

紅葉、紅葉、この赤いもみぢ、僕が一昨日取って来たこの紅葉

枝振りのよいところを三枝程手折り箱に入れて今送ります。

これは君がこちらに居た時僕と一緒に木切りに行ったあの三峠

ま に
思 思
と よ　比 比
の か
内 内

のふもと此 雑木林の中よあったのを、先日 僕のお友達二三人を
木切りに行って手折って来たのです。
君はこれを眺めて 僕と一緒に 仲よく山遊びした事や、木を切
まよ行った事など 思ひ出して くれるだらう。 級の中で一番
仲のよかった君、 僕は今日の前よ君の事を思ひながら此の
手紙を かいてゐる。
僕の永久の友は 君と内田君だけだ。 今君と内田君とよこの
紅葉を おくる。
山の友より。

旅行の状況を報ず　高一 園田二郎

葉 葉
ま れ
る た
秋 秋
暮 暮
秋季 秋季
本 本
景色 景色

三峠の紅葉の色あせて、 山里よ冬は訪れて参りました。
日は雲よ入りて野山はひそけくも
かぜに木の葉の落つるこゑあり
天高くして馬肥ゆるといふ 秋空の青く、色ざめた山々が暮
れてゆく。 麥蒔で今農家は忙しい。
僕等の秋季修學旅行は甲府方面でした。今その概況を報告
しませう。 十一月四日 朝くらい中に 本校出發、朝風寒きこ
ろ甲府驛よつきました。 それから直ちよ御嶽に向ひ、約四
粁の山道を御岳の景色を想像しつつ希望にもえて足
を早め やがて長潭よ到着しました。

此　の
よ　に
の　か
岸　岸
跨ゞ　とマタガル
昇　昇

いづこより流れ来るか荒川の
　昇仙峡の名は世に高し

此處は昇仙峡のはじめで、荒川は深くよどみ岩は切り立ち、その割目へ松はかじりついて生きてゐる。長潭橋はそれ両岸の山崖へとつしりやゞ跨って居ます。

岩骨に生え立つ松は眞清水と
　ともにこの地へ人を呼ぶなり

荒川のながれの功も多くして
　昇仙峡はうるはしきかな

人面石、駱駝石等荒川に添ってあります。登龍岩といふ岩、これは花崗岩の中に特に變った岩の食ひ入り、龍の

堂々とする
非常、非常
又目雨　五月雨
等等　あた
思の　思か
此　の
覚円、覺圓
せ　す

天に登らうとする形をして居て、學問的にも非常に尊ばれてゐるさうです。五月雨岩、これは五月雨の降る形、夢の松島、これは又何といふよい眺めでせう。如何に山中に育った僕等でも足を止めずには居られませんでした。

ゆめのごと思ひながむる岩と水
　人立ちとまるゆめのまにまに

覚円の修業の跡とつたへらる
　覚円峯は雄々しくもあり

覚円峯は昇仙峡間第一の峻峯で、切り立った岩骨には松が生えてゐる。荒川は清らかに流れ去り、又流れ来ってつきせぬ眺めです。

景　景
作 も此　作 もの
等　等
帝里　けり
ま と　に よ

荒川の流は清く何時の間よ
　作りけるかな此の景勝地

石門、これは天然の大石が自然の門を作ったも此なのでも。こゝまで来ると仙娥瀧のひゞきは高くきこえ我等の心は勇む。

岩壁をうちて落つる仙娥瀧
　しぶきは立ちて虹ふきに帝里

昇仙橋上に立って眺むれば眼前よ突立っは覚円峯、傍よ響くは仙娥瀧、荒川の水は清く流れ去る。左といひ右といひ、皆岩壁よしで何またとへたならいやら、豪壮と言はうか、これこそ天下よ誇る奇勝です。

此　の
竜　思
地　地
井然　井然セイゼン
きちんとととのふ
為　た
体　体
様子　様子
秋　秋
やこ　と

甲府への帰途よついて、町の色々の豫想は心よ満ちたものです。踏みしめた事此無い此の地、夕日を受けて甲府の町は井然とけむって居まし為。米倉旅館よたどりついて身体を休めましたが、それから疲れて為る身体へ元氣を出して甲府の夜の様子を見るためよ友達と遊ひよ出まし為。光り輝くネオンサイン、街の賑やかで美しいこと。十四歳の秋、僕達が斯うして甲府の夜を遊んだ事は、永遠に忘れられぬ記憶として僕の頭にきざみこまれる事だらう。翌日甲府城へ上りての眺望、武田神社へ詣で、此英雄をしたふこゝろ、甲府聯隊での勇しい氣持、遊亀公園此

動　動
思出の柱　思出の種
さ　さ
あ　た
行　行
様子　様子
紅葉　紅葉
時雨　時雨
秋　秋
て　て
思　思

動物園の見學、酒折神社の参拜などもよい思出の種と
なる事でせう。
甲府よさよなら。僕達はなつかしい御岳と甲府を後にして
五日の夕方故郷への歸途につきました。
以上見たまゝを取り急ぎお知らせまで　草々

姉に旅行の様子を報せ　高一　安田成行

紅葉、紅葉、秋の紅葉、御岳の紅葉。
静かに降る時雨の秋、たのしい旅行が四日五日ときへめられて
思はずこころの躍り立ちました。

を　す
岳　嶽
旅行　旅行
景色　景色
様子　様子
語　語
帝　け
単　單
思　思
紅葉　紅葉
坂　を

姉さん、恵坊はもう遠足のをすみましたか。僕等は甲府御
岳へ一泊二日で旅行致しました。御岳の景色は實に壮観
でした。始めから終までの旅行の様子を語れば余り長くなり
ますから、御岳について帝簡単に書き記しませう。
長潭橋についた時下の水は深くよどんで、中に龍のひそむのと
思ふくらいでした。それに御岳の紅葉のうつつて、それ美しい
いつたらないです。

長とろの橋にたゝずめば　崖下に
　水にみたけのもみぢうつれり

それから鷹の巣山坂左に見て、人面石、駱駝石、ろくろ瀧

富 見 色 葉 た と に 和 と す けり 雪

猿岩　富士石　等をみんなから美しい景色をほめて奥へ進みました。五月岩、登龍岩もよかったけれども、もえるやうな御岳の紅葉に大變こころを打たれて昇仙橋につきました。橋にたたずんで瀧を眺めると、一面の水煙に涼しさを感じました。午後一時ころ瀧から下り、和田峠にかかつてふりかへり富士を眺めその美しさに驚きました。

かすみにも富士は見えけりその裾に
白くも着たる雪の神山

峠を越えて甲府の宿屋へついたのが五時ころでした。大變疲れてゐたので　その時どんなに嬉しかったか御想像して

見 さい の 町 よ と た 体

岩村繁　大正一一・三・二四生　宝村大幡四五五六　犬、バラの花、國史を好む　希望 未定　目下在學中

行 様子 す 郎 い の 間 は

途 か

見て下さい。其の夜は甲府の町をちよつと見てから疲れて居たので早く床につきました。

右簡單にお知らせまで御身体を御大切に

友に旅行の様子を報ずる手紙　　高一　岩村繁

十太郎「君、月日のたつのは早いもの、もう冬になりました。

十一月四日・五日の二日間、私達は甲府御岳方面へ旅行しました。

朝學校を四時半ころ出發し、峠を越して初狩から六時二十四分の電車に乗って甲府へ向ふ途中、いくつのトン

勝　勝
詠　ヨム
は　は
日下部　クサカベ
石和　イサワ
す　す

ンネルをくゞつて勝沼へ着きました。

勝沼や電車の中で眺むれは
見ゆるかぎりは葡萄園なり

勝沼には葡萄園がたくさんあります。芭蕉でさへ

勝沼や馬子も葡萄を食ひながら

と詠んださうです。

電車は塩山日下部、石和酒折の驛を過ぎ甲府驛へつきました。僕達ははじめて甲府へ来たので色々なめづらしいものにそちこち目を奪はれながら甲府の町を歩きました。

行　行
和田峠　和田峠
は　は
た　た
間　間
学校　學校
發　かけ
度　度
と　堂
す　す
に　ま
い　が
動　動
見　見
林　林
時　時
ま　ま
行　行
覚円　覺圓
を　を
と　と
昇　昇
渡　渡
た　た

甲府から御岳へ行く和田峠の途中には白山がありますが、時間の関係で登る事が出来ず千代田小学校へ向ひました。千代田小学校でお辨當を食べてから出發しましたが、今度は下り坂だったので僕はほっとしました。

天神森へついて長潭橋の上から見下すと、荒川の流が静かに澄み、岩の上には松がしがみついてゐました。人面石、猿岩、不動瀧等を見て天鼓林へ着いた時、地が鳴るといふので皆が足で強く踏んだりしました。少し行くと覚円峯といふ山の岩がそびえて居て、石門をくゞると目の前に昇仙橋が見えるのでよろこびの聲を揚げながら橋を渡って仙娥瀧の前へ出ました。

景色　景色
米倉旅館　米倉旅館
ました
町見
は
けれい
たて
舞鶴　舞鶴
舞鶴　舞鶴
けり
北の
にに
白根　白根
ました

仙娥瀧はとても景色のよいので長くうっとりと見とれてゐたものです。瀧から今来たみちを引返して米倉旅館へつきました。　夜は先生のゆるしを受けて甲府の町を見物しました。中でも銀座通りはとりわけきれいでした。
二日目は七時半ごろ米倉を出て舞鶴城に上りました。
舞鶴の城よりのぼって眺むれば
甲府盆地ははろばろなりけり
西北方には駒岳、白根山等の山々が連って居るのが見えて雄大な感に打たれました。
つつじヶ崎武田神社で眺むれば
はるか向ふにあつまやのみゆ

色々　色々
説明を　説明
以い
急ぎ
時
相川　相川
町
公園
の
動物　動物
見
酒折駅　酒折駅
参拝
若松町駅
自動車　自動車
か
愉快　愉快
折を　折
是非　是非
一度　一度
遊　遊
れお
満ます
旅行　旅行

武田神社で色々と先生に説明をして頂いて歩兵四十九聯隊へ急ぎました。　営内を見学してから昼食を食べ、一時ごろ相川に沿って下り太田町公園へつきました。　動物園の猿やその他色々の動物を見て、それから善光寺、酒折宮に参拝し酒折駅から電車で若松町駅まで来て自動車で家へかへりました。とても愉快な旅行でした。君も折があれば是非一度御岳へ遊びに行き給へ。これで、やめます。　では旅行の概況お知らせまで。
さよなら (11.20)

旅先より伯文様へ
高一　亀田明

秋も 終 紅 其の後 児童 は 致 しました と

に 地 続 見 果 実 何時 酒折駅 何す 甲府 愈々 折 長

秋も終りに近づいて山も真紅に染められて参りましたね。
其の後伯父さんにはお変りありませんか。
十一月四日五日の両日、僕等高等科児童は甲府方面へ修
学旅行を致しました。長い笹子トンネルを出ると一安心
しますと、又次から次へトンネルがおそひかゝつて来て やがて目
もはるかに甲府盆地が坦々として続いてゐるのが見えます。
果てしなく続く葡萄園を汽車の窓から見ながら、何時しか
酒折駅も過ぎて早くも汽車は甲府駅へ着きました。愈々
目指す御岳昇仙峡へ向ふのです。
曲り折れる長い道を通って御岳昇仙峡へ着きました。

深 谷底 の かゝれる 橋 を 寄 見 よどみ た 画 に 松 登龍岩 かけて 勢よく 奥 屋根 見せて 羅漢寺

深い谷底を荒川の流が洗つてゐます。

青々と谷底深く流る水
上にかゝれる長とろ橋
長潭の橋の手すりに身を寄せて
見下す川はよどみふかしも

痛い足を引きずりながら緩やかな坂みちを通って五月雨
岩につきました。名前の通り五月雨を画いて眼前にそびえ
て居ます。少し行くと左手に松を背にした登龍岩が、岩
間を天を目がけて勢よく昇って居ました。荒川に沿ひから
走る板橋のあつて遥か奥に屋根を少し見せて羅漢寺
があります。荒川の流にとり巻かれた夢の松島が小春

日和　日和
景色　景色
の空と烏たか
覚円　覚圓
比　此
傳説　傳説
が　を
た　お
昇　昇
橋　橋
常　け
生　れ
縦　張
思　思
倚　ヨル
よりかゝること
手擦　テスリ
京　急
想像　想像
幾千　幾千
万　萬
無　無

日和にねむってゐます。山に登った僕達もこゝろから此の山の景色のよいのを味はゝされました。

眼前に天空をつき抜かんばかりに覚円峯の切り立って聳えて居ます。昔覚円といふ僧が此の山の岩の上で修業をしたといふ傳説がある事を先生がお話しして下さいました。

昇仙峡へつきました。来て見ればこれは太した橋ではありませんが太した橋でな常生はない程、何かしら尊く思はれました。橋に倚ってれ木の手擦に身を寄せて下を見下した時には、古を想像して幾千年の前、この橋に仙人の昇ったのであるといふ事を深く考へさせられました。

此の
見　見
谷　谷
常　け
に　に
畫　畫
飼　ヒルゲ
の　か
殘　を
浪　浪
磐石　バンジャク
大きな石
峨　峨
急　急
突　寒
轟々　轟々　ゴウゴウ
物すごき音の形容
浴　浴

切り立てる岩の間を見下せば
谷底ふかくさけぶ荒川
荒川の流は常しき岩の上に
畫飼食へつゝのたる人々

昇仙峡を渡って頭上にのぶさるやうな大磐石をくゞって仙娥瀧へ出ました。邊りが余り切り立ってゐるので、もう正午だと言ふのに何處からも日の光の入って来ません。真白な水が三段に落ちて居ます。二千米も離れてゐる僕達の所までもしぶきが飛んで来ます。今まで汗をふきふき登って来た僕も急に寒さを感じ初めました。僕等は轟々たる物すごい音を立てる瀧のしぶきを浴びながらへんたうを食

落ちました
落
しぶき
岩
瀧
身体
た
明
は
甲府
見物
望
す
山梨縣廳
内
見
太田町

へ落ちました。

三段に岩間を落つる仙娥瀧
しぶきをあびる岩のつめたさ

岩山にこだます音もけたたまし
岩間を落つる三段の瀧

夕方甲府の宿へ着いてゆっくり身体を休ませました。
そして眠れない一夜を明して今日は甲府の見物です。先づ舞
鶴城址に上つての展望ですが、眼下に山梨縣廳をはじめ
甲府市が一目に見える事でせう。
武田神社参拝　歩兵四十九聯隊營内見學　太田町公園觀

覺
等
思
此
様子
致
旅行
草々
行
姉
よ
申譯
暮
朝晩
分
寒
参
身体
注意
兒童
紅葉

覺等を思ひ画いて僕は今此の通信をかいて居ます。今日
此様子は又かへつてからゆつくりくはしく書く事に致しませう。
先は修学旅行第一日の様子御報知まで。　草々 (11.6)

旅行の様子を姉に報す　　高一　見高孝二

姉さん、長い間おたよりもせずまことに申譯御座いません。
その後御達者でお暮しですか。小生も元氣で通學して
居ります。もう朝晩大分寒くなつて参りましたね。お身体に
御注意下さい。
先日、小生等高等科兒童一同紅葉の御岳へ旅行しました。

樣子 樣子　お致 お致　た　和田峠 和田峠　の節 かけ　橋 橋　見 見　景色 景色　よ よ　れ れ　行 行　色々 色々　い い　覺圓 覺圓　此 の　程 程

今ちよつと旅行の樣子をお知らせ致しませう。
午前七時半ころ甲府驛につきました。和田峠を越えて御
岳へ向ひ午前九時ごろ長潭につきました。荒川の節て
ある長潭橋で見下すと水は青く澄んで何とも言へない景
色です。

長とろのよどめる水はきよらかなりき
上から見ればこころおどりて

それから少し行くと人面石だとか富士石だとか色々珍しい
石がありました。痛い足を引きずりながらやっと覺圓峯
の見えるところまで行きました。見れば見る程恐ろしい岩です。

然 然　滋 波　愈々 愈々　寒 と　程 程　時 時　る す　の か　ま た　の事をかきて　お あ　一度 一度　も は　ま れ

覺圓が修業したりと傳へらる
岩はおそろし覺圓の峯

それからちよつと行くと石門があります。自然に出來た
岩の門だから珍しいでせう。昇仙橋を渡ると愈々最後の
仙娥瀧です。側に居ると寒い程です。

仙娥瀧岩の間を落つる時
白く泡立ちけむりあるかな

そこで晝飯をたべまして歸途につきました。が、とてもおも
しろい旅でした。姉さんもふだんからここの事をきいて
一度は御岳へ行って來るですね……
では今日はこれまで止めます。
さよなら
(4.17)

紅葉狩 紅葉狩
誘ふ 誘ふ
秋 秋
紙 紙
の か
私 私
無沙汰 無沙汰
お は
雨 雨
葉 葉
境 境
見 見
朝日 朝日
と と
紅葉 紅葉
輝 輝
美 美
昨日 昨日
大勢 大勢
今度 今度
豫定 豫定
矢張 矢張
思 思
何 何

紅葉狩に友を誘ふ

高一 高部春子

まあお懐しい秋子さま、先日は御手紙ありがたうね。私は何時も御無沙汰ばかりしてゐて誠にすみません。あたりは一雨毎に紅葉へとかはってゆきますね。村境にそびえてみえる云峠の如きは今見ころです。朝日がぱっと光を放つと山は紅葉がきれいに輝き何とも言へぬ美しさです。ですから昨日あたりも村の人達が大勢登ったやうです。私達も今度十一月四日五日の修学旅行に御岳へゆく豫定なのです。矢張きれいな紅葉が見られるのと思ふと何となくてうれしくてなりません。

様子 様子
思 思
今度 今度
お お
寒 寒
秋 秋
紅葉 紅葉
見 見
庭 庭

又かへって来ましたらくはしく旅行の様子をお知らせするつもりですの。それまでに一度紅葉がりに参りませんか。今が丁度一番よい時期だと思ひますので もし出来る事なら今度の日曜あたりはどう。都合ついたらお出で下さい。お待ちして居りますから。

では又 さようなら

(10.22)

慕へる師に寄す

高一 園田華都子

先生! 日にく寒さの加り秋も深くなって参りましたのね。四方の山の紅葉の錦を着てゐるやうにみえます。庭のコスモスもさびしく庭をにぎはせて居ります。

はの紅葉　色色
残　残
あれ　あの
もは
空　寒
いよ　いよ
空野　天野
空　と
丁渡　丁度
會　會ふ
私　私
無　無
思　思
程　程
嬉　嬉

三峠は紅葉し日一日と色つき初め、私はカレンダーのだんだん残り少くなって行きます。

あれ高い碧空、夜は鎌のやうな月がくっきりと寒さうにふるへて居ります。

いよいよ待ちに待った修学旅行も近づきました。天野先生はお話に依りますと方面は甲府だとの事、日は十一月四日五日だそうです。先生、丁度四日は日曜ですから甲府驛までお出で下さいませ。若し先生にお會ひ出来る事が出来ますならば、私は夢では無いかと思はれる程嬉しう御座います。今からその日がどんなに待ちどほ

おお　私私
ほ　か
本当　本富
れ　お
は　の
致　致
ます　ます
御無沙汰　御無沙汰
思　思

しいか分りません。

先生！私達をがつかりさせないやうにきっと驛までお出むかへ下さいませね。本当にお願ひして置きます。

ではその時にね。　さよなら

(1026)

なつかしき友へ　高一　柴田次子

おなつかしき朝子様、故郷の次子よりおたより致します。もう長いこと御無沙汰致してしまひました。ペンを取らう取らうと思ひながら、つい筆不精のことゝて失礼致してばかり居りました。

晩 寒　秋　此　紅葉　本當　ます　都會　行　朝行　働いて　は　朝　働　様け

朝晩めっきり寒くなりまして 毎日お仕事に出るのがおつらい事でせうね。朝子さんとお別れしてからはじめての秋が此の山里へも訪れて参りました。御存じの三峠、あの山の頂はもうすっかり紅葉で染って 本當に秋らしい美しさを誇って居ります。

故郷を離れて遠く都會へ行かれた敏子さん、いつもお元氣で働いてお出でですか。今農家は一年中で一番忙しいと言ってよい位忙しい時です。村中の人たちの朝から晩まで、生々と働きつゞけて居ります。朝子さんのお家でも皆様達者で働いて居らっしゃいます。故御安心下さいませ。

秋　此の葉は　暮　貴様子知　紅葉誘　大　れ　姉様夕暮　の

秋の終ると 木の葉の落ちつくして 山も次第にさびしくなり 木枯のぴうぴうと吹き荒ぶ冬の訪れて参るでせう。どうぞ御身にお氣をつけて御暮し下さい。そうしてときどきに貴女の御様子もお知らせ下さいね。ではさようなら (10.20)

従姉を紅葉に誘ふ

高一 高部政子

お姉様久しくお便りのきれましたね。又三峠の麓にも秋が訪れて参りました。去年お祖母さまのおなくなりになって、お姉様と二人で夕暮おそく、お祖母さまのお墓へみあかしをつけに行く時、お寺の森の中から飛出したあれ

思 思　見 見 あた　橋 橋 様 様　覚 覚 束 束　変 変 橋 橋 常盤とけれど　紅葉 紅葉 もは　月色 行色　歯に ます　此 此 一技 一度　案内 案内 致 致

烏を思ひ出せでせう。今も夕烏の一聲二聲鳴きながら
行くのを見て ふっと去年の事を思ひ出しました。私の
家の前のあの石橋を御らんになって、お姉様の 私の幼い
時 この橋の朽ちたら この絵尺へお出でになるって御約束
したっけね。
今も昔と変らない橋で御座いますと、三峠の紅葉も日一日と
紅に色ついて行きますに。此の幼いころの故郷へ一技お出で
なさいませ。私も三峠へは一技登りましたから、紅葉ふ此
御案内を致しませう。
春のおそく秋の早い山里、もう三峠の頂へは霜柱の立

あた　紅葉 紅葉　様 様　誘 誘サフ　まに　東京 東京　そす　秋 秋 あた　紅葉 紅葉　此の　思 思

った私達の先生がおっしゃいました。早くいらっしゃらな
いと紅葉ふのみんな散ってしまひます。お兄様をもお誘
ひしてお出でになるのを心からお待ちして居ります。
さよなら
(10.22)

東京の友を呼ぶ
高一 矢竹本江

たか子さん。お久しぶりですね。
都塵を離れた田舎にもう秋が訪れて来ました。あの
美しい紅葉も眞赤にさいてきれいです。秋になると何と
なくさみしくなってあなたの此事など思ひ出されてきます。

一度	私	貴女	のか	にす	東京	様子	紅葉	致	渡辺マサヱ 大正一一・三・一九生 宮村中津森留二二 修身ヲ好ム 希望未定 昭和一〇・一二高一 退学今家ニ在リ	都
一度	私	貴女（アナタ）	か	す	東京	様子	紅葉	致		都

もみぢをみに一度ぐらいはお出で下さい。あなたとお別れしてからもうよほどの月日がたってしまひましたもの。私達三の年生のころ、貴女と遊んだ事などを考へ出してはお友達とかたり合ふやうな事もありました。

あなたも是非一度こちらへお出でになり、東京の様子をもおきかせ下さい。紅葉の時案内致します。

お健やかに暮らして下さいませ。さようなら (10.27)

都の友を山へ誘ふ

中退 渡辺マサヱ

たか子さん、もうお別れしてから長い年月が知らぬ間に過

誘	居	私	私	分校	鬼	思出	を	れ	の	さ	せ	紅葉	生	素	都會	住	時
誘	居	た	私	分校	鬼	思出	す	の	か	た	れ	紅葉	れ	素	都會	住	時

ぎ去ってしまひましたね。私達が一緒に分校へ行って居た時には、けんくわしたり鬼ごっこしたりいろくおもしろい思出のありますね。私はあれころの事がたまらなくなつかしくなるのです。

あなたとお別れしてから又幾回目かの秋のやって来ました。私達田舎は秋が早いので三峠がすっかり紅葉になってそれは素ばらしい眺めです。私達には少しも珍しくない山も、たか子さんのやうな都會の真中に住んでゐる人たちにはどんなによろこばれる事でせう。

今年は是非よい時をえらんであそびにお出で下さい。

紅葉 紅葉
本江 本江
一緒 一緒
用意 用意
り 行
様子 様子
紅葉 紅葉
かけ かけ
見 見
に に
晩秋 晩秋
時折 時折
過 過
よ よ
あ あ
裏 裏
葉 葉
致 致

きれいな紅葉の三峠へ本江さん達と一緒に登りませう。
十分用意をして御待ちして居ります。さようなら。

恩師に旅行の様子を報ず。

高一 高部春子

先生、三峠はもう紅葉のかけさへ消え失せて、今はもう見ゆるかぎり枯木の姿とかはりました。空にさ迷ふ晩秋の雲のかげが時折三峠の山肌をかすめて過ぎます。先生によくお話をして頂いた私の裏山の今年最後の姿を示して今葉の落ちやうとしてゐます。

先日私達は甲府方面へ旅行致しました。そして富岳や

市内 市内
見学 見學
の の
嬉 嬉
無事 無事
了 ヲヘル
突然 突然
會 會
様 様
氣 氣
致 致

甲府市内を見学しました。

切り立ちし岩の間を落つる瀧
つどひ来れる人なかあうな

古の城の跡さへ消え失せて
むかしを語るかげは身にしむ

もうでたる武田の宮の前に立ち
古き歴史のしのばれるかな

嬉しくもたのしい二日の旅行を無事に了へて帰途についた時、突然先生にお會ひしたのでまるで夢の様な氣が致しました。

くさかへの驛まで降る、先生の
やさしき姿忘られぬかな

和歌　和歌
笑　笑
そ　す
旅行　旅行
様子　様子
そ　す
落葉　落葉
望　望
私　私
無事　無事
暮　暮
居りそ　ます
働　働

先生下手な和歌お笑ひ下さい。
御健康をお祈りします。

旅行の様子を兄のもとへ　高一　高部濱子　(12.2)

兄さん、
すっきりと澄んだ大空、はらはらと落葉の散る秋、希望に
もえる三峠をながめながら、私達一家はたのしく無事に暮
して居ります。兄さんもあの秋の澄み切った大空に、まぶしく
光る太陽を浴びながら、せっせと働いて居らっしゃる事でせ
うね。　私達

行　行
無事　無事
過　過
ゐ　た
景色　景色
登龍　登龍
五月雨　五月雨
潭　潭
天狗　天狗
実　マコトニ
素晴　素晴
ま　にり
何も　何も
足　見

高等科児童一同は十月の日五日と二日がかりで御岳甲府へ
の修学旅行をたのしく無事に過せる事の出来ました。私が
特にこころを引かれた事は御岳の景色の壮大な事でした。
夢の松島、登龍岩、五月雨岩、長潭、天狗岩等は実に
素晴しいながめでした。

　石門をつかれし足を引きながら
　くぐりし時にしつく落ちけり

というあつかり疲れ切った私達は、何も譯の分らないやうになって
足を引きずりながら石門の下を通ったものです。

　秋山にひそもり立てる羅漢寺は
　主なき寺のつんるしさびしき

葉	葉
散	散
には	には
思	思
と	と
の	の
は	は
け	け
かな	かな
私	私
一緒	一緒
居りました	居りました
思	思
秋	秋
れ	れ
時	時
さ	さ
東京	東京

落葉のはらはらと散る その山の中に寺があって、その寺には誰も居らないのかと思はれる程 ひっそりとして居ました。

荒川の水は走って今日も又

流れの旅をつゞけて居るのかな

毎日々々 私たちの旅のやうに 荒川は旅をつゞけて、今日も又私たちと一緒に あてのない旅をして 走って居りました。 たのしいとも思はれ、哀れとも思はれる秋の旅をつゞける 荒川でせう。田舎のひっそりとした淋しいところへ 生れた私たちは、夜甲府市街を歩いた時に、一番目についたのは ネオンサインのまばゆさでした。 兄さんは いつもいつも あのにぎやかな東京市街の

美	美
見	見
れ	れ
は	は
思	思
町	町
た	た
見学	見學
致	致
程	程
行	行
舊师	舊師
様子	樣子
車	車
時	時

美しさを見て居られるでせうが、私も田舎にばっかり居りましたので、とてもめづらしく思って夜の町を歩き廻りました。二日目は甲府市内外の見学をしてかへりましたので、またく色々お知らせ致したい事は山程ありますが、旅行からかへったばかりで思ってゐる事もまとまりませんし、夜ももうずゐ分おそくなりましたので、少し落ちついてから折を見てくはしくお知らせ致しませう。 ではお寝みなさいませ。

舊師へ旅行の樣子を報ず　高一 前田ヒサ子

「先生、先生」「松村先生」といふ聲が汽車の中で起った時

嬉しくて嬉しくて私達は飛上る思ひでした。

いつも醉ふ汽車も今日だけ醉はさりき
舊師の君に會へしうれしさ

二年を會はで過ぎにし師の影は
やせ給ふごとくみゆるかなしさ

先生は少しも変って居りませんでした。口を大きくあけておもしろさうに笑ふところ等昔のまゝでした。けれども頬の少しこけたやうな氣のしましたのは私だけでせうか知ら。

勇ましき音を立てゐる仙娥瀧
甲斐の男の子の意氣をしめして

御岳の旅は大変つかれましたけれども、仙娥瀧の風景此雄々しい流は本當に甲斐の男子の意氣を示して居るやうでした。此處では来る人々の寫眞をとってゐました。

友とねる遠足の夜のたのしさも
明日のつかれが氣になるなり

明日は甲府の見物、善光寺の参拝、酒折宮参詣の予定でした。この日は先生たちも遠足といふ事をお手紙で知って居ましたので、先生にお會ひしたいと祈って居ました。

古は城ありときく公園の
高きに立てはむかしおもほゆ

嬉 嬉　思 思　たけ　師 師　れ れ　影 影　の　見 見　は は　せ せ　あ あ　さ さ　け け　か　意氣 意氣　てめ

大変 大変　けれ　風景 風景　本當 本當　の　た　明日　に　は　酒折宮 酒折宮　予定 予定　會 會

な　な
の　の
思　思
想像、想像
れ　れ
酒　酒
い　い
け　程
大野　大野
菓子　菓子
元氣　元氣
會　會
出来　出来
と　思
學校　學校
嬉　嬉
十分　十分
時間　時間
無　無
本當　本當

舞鶴公園から甲府をながめた時の氣持は、何とも言へませんでした。古は此處で城主の甲斐の國を治めたのかと思ふと昔の事がさまざまに想像されました。疲れた足を引きづつて善光寺まで行き、酒折宮までたどりつけた時はもう歩けない程でしたが、里垣の大野さんって方からみんなお菓子をいただいて元氣づき、汽車へ乗りこみました。

松村先生とはもうお會ひ出来ないのかと思って、平等のあの立派な学校を思ひ出してゐる時「松村先生が」といふ嬉しさうな聲が起りました。けれど、あんな下りぎわで十分おはなしする時間も無く、本當に口惜しう

是非、是非
度　度
會　會
色々　色々
思　思
暮　暮
程　程
り　り
す　す
行　行
様子　様子
姉　姉
ま　ま
霜月　霜月
十一月のこと
寒　寒
續　續
無事　無事
此　此
す　す
と　と

御座いました。又何時か折が御座いましたら、是非一度ゆっくりお會ひして色々おはなしを承りたいと思って居ります。

では先生御健康でお暮しの程をお祈り申し上げます。(11.17)

旅行の様子を姉に報ず　高一　堀内富子

お姉さま、霜月に入って少し寒さの強くなって参りましたね。お姉さまには何のお変りも御座いませんか。私達一同無事でゐますから御安心下さい。此の前、お姉様と、行って来たら必ずお知らせするやうお約束しておいた旅行の事を今お知

致さ　致せ
朝　朝
学校　學校
の帝　かけ
出しました
暗　暗
道　道
ゐ　は
様々　様々
景色　景色
ま　に
見渡もの切り　見渡すかぎり
見　見
来　来れ
ケ里　けり

らせ致します。

十一月四日朝四時半ころ学校を出の発致しました。初狩峠は朝また暗い中に道は水のあふれ出して居たりして大変に困りました。東の空のしらむころ初狩駅につきました。そして六時二十四分に汽車で初狩を発ちました。車窓にはかはる様々の景色の展開しましたが、中にも勝沼の葡萄園の如きは、見渡もの限り廣々として居るのに驚きました。甲府駅で電車を降りて御岳へ向ひましたが随分な人混でした。

名もたかき昇仙峡へ来て見れば
狭き山路に客あふれケ里

空　程と
将に　マサニ
思　思
見　見
無　無
度　度

小春日のあたたかい日でしたので　リュクサックを背負った背中の汗でしっとりしみぬれた程です。少しゆくと鷹の巣山です。

青空に切り立つ岩の片はしに
松の命はあやふげにして
今将に天にのみつく様の石
これぞ名だかき登龍の岩
力足ふめど音せぬ天鼓林
たゞ松の木のあるばかりなり

暫く行くと思はずみんな立止りました。見ると無理はありません。これこそ何度見ても見あきぬという夢の松島です。

ゐ か
思 思 覚円 覺圓
此 の
此 此 残 き
ゐ 音
守 け
〻 て ま り

誰の考へたの知らないの、よい名をつけたものだと 私はつくづく
思ひましゐ。 又行くと覚円峯。

青空にそびゆる峯は切り立ちて
昇仙一の峻峯なりき

僧覚円がその巖の上で修業したと傳へられてゐる有名な覚円峯でせ。 此のけはしい峯の何處で修業残したのだらうかと 一人で僧覚円の事を思ひました。 行く目の前に石門があって其處を通ると 物凄い水の音。

仙娥瀧しふきあげつゝ水は落ち
瀧つぼ低く日はたゆく照る

仙娥瀧は三段になって 岩は 切り立った間から水の物凄

輝紀 輝き
途 途
ゐ た
ま に
ゐ か
出発 出發
ㇾ の

く落ち、日光にあたって 輝紀 何とも言へぬ美観でした。 瀧を眺めながら晝食を食べ、午後二時ころから帰途につきましゐか 米倉旅館へ着いた時はもう薄暗くて腹は空き足は痛くて、座敷へ横に寝ころんでしまひましゐ。 夕飯をすませてからそれでも銀座通りを見物しましゐ。

甲府市の銀座通はにぎやかに
目をくらまして ネオン輝く

翌日は七時頃宿を出発して 先づ第一に舞鶴城へ上り、そこで色々のお話をききましゐ。 ここは昔のお城の後で石垣などがこはれかかって居りました。

躑躅ヶ崎舘址　武田信玄の館址　西山梨郡相川村
見　見
明　明
す　た
案内　案内
色々　色々
か　か
行けは
動物　動物
な　な
酒　酒
無事　無事
自動車　自動車

躑躅ヶ崎の館址、武田神社、要塞（害）城址等を見たり或
は説明して頂いたりして四十九聯隊へ行きました。そこでは
兵隊さんに案内してもらって、色々お話を伺ひました。

　相川のながれに沿ひて下り行けば
　公園近くなりてうれしや
　公園の池また、ずる人々に
　可愛ゆきあひる餌をあさるなり

動物園で色々の動物を見てから痛い足を引きずりながら
善光寺に詣で酒折宮へ参拝して、酒折驛を午後五時
十一分で發ちました。途中無事まで六時五十八分谷村横町
驛着、それから自動車で八時ころ家へつきました。

行　行
色々　色々
を　す
か　か
来　本
様　様
秋景色　秋景色
な　な
過　過
し　た
無

二日間の旅行がこうして無事に出来ましたのも、姉様のみん
な骨を折って働いて色々と支度して下さったからこそと
深く感謝して居ります。旅行が終りましたので、これ
から私も元氣になって勉強します。
姉様も丈夫でお働き下さい。常に健康をお祈りします。
よし子
(11.17)

旅行の様子を姉の許へ　高一　佐藤ヨシ子

血のやうな希望まもえる秋の景色をながめながら幾日か過
してしまひました。お姉様まお何のお変りも無くお過し

思　思
私達　私達
高等科　高等科
北の　旅行　無事
致　其
島　す　も
え　は　勇　ふ
此　い　縦　程

の事と思ひました。

去る四日と五日の二日間、私達高等科一同、御岳昇仙峡及び甲府へ此旅行を無事に致しました。

此の中で最も私の心に強く感じたところは、仙娥瀧の勇ましさ、夢の松島、昇仙橋、長潭、不動瀧、人面石等です。

そして甲府の夜の美しさです。

　仙娥たきもこい響音に泡立て、
　　ざあく落ちる水は勇し

仙娥瀧は高さ十丈三段になって水しぶきを立てゝ物すごい程勇ましく落ちてゐました。

景色　景色
と　よ
橋　橋
見え　見え
う　か
此の
思　思
動物　動物
ち　ち

　景色よき夢の松島岩と水
　　幾日見てもあきる事なし
　長とろの橋の上より見下せば
　　溪流ふかくよどみ居るのな

荒川の溪流が深くよどんで、龍でも住むもののやうに思はれるのが長潭です。

夜旅館について、から甲府市街を見物しました。ネオンサインのきらめいて、大変まぎやかなところでした。甲府銀座といふのださうです。

又日は甲府市街及び動物園を見物しました。私たちのやうに田舎に生れた者は、斯ういふ賑やかなところに一生住

見 見
色々 色々
ます ます
の の
様子 様子
姉 姉
まに すに
御無沙汰 御無沙汰
段 致
秋 秋
た は
変 變
帝 り
私 私

んで見たいやうな氣がしました。
また色々お知らせしたい事があります。又ひまを見てお
きませう。
さようなら
(11.20)

旅行の様子を姉に知らせる
高一 安田孝子

姉さん長い間御無沙汰して誠に申譯ありません。
秋もだんだん深くなりもう十一月の半ばになってしまひました。
その後姉さんはお變りありませんか。御伺ひ申し上げます。
私も至って丈夫です。御安心下さい。
去る十一月の四日五日 私達は甲府と御岳へとまりがけの

行 行
た た
景 景
か か
見 見
顔 顔
景色 景色
は は
非常 非常
け け
様子 様子

旅行をしました。第一日目は御岳へ行きました。天
下の景勝地御岳には心を打たれるものが随分たくさん御座
いました。花崗岩の砂山を見たり、岩にしがみついた松
や人間の顔の形をした石のあったりして、仙娥瀧へ着いた
のは正午頃でした。仙娥瀧の景色は非常によく、いくら見
てゐても少しも飽きるやうな事はありませんでした。

仙娥たき上より落つる水の音
みんなそれぞれほめてゐるのな

仙娥瀧三段に落つる水の面に
しぶきぞ立ちて虹となりける

その虹の立つ様子の美しいったらありません。私達は仙娥

うを　かす
ま　り
登　登
和田　和田
あ　け
見物　見物
町　町
程　程
き　た
朝舞鶴　朝舞鶴
見　見

龍より上へ行のをよして歸途につきましたの、かへりには
皆登る時より元氣でした。
和田峠を越えて甲府の町へ入った時はもうほの暗いころでし
た。宿へついたら足の棒のやうになって歩けない位でした。
夕食を食へて町を見物に出かけましたが、三日町通りは
目もまばゆい程でした。　叔父さんの家をさがして見ましたが、
夜ではあり町は広いし少しも見付かりませんでした。　宿へかへ
り床につきましたのなかなか眠れないで困りました。
翌朝起きて御飯を食べ第一番に舞鶴城へ上りました。
謝恩碑のある高いところから下を見ると甲府市が一目に

見　見
う　か
よ　に
この　よか
そ　す
あ　た
動物　動物
里垣　里垣
ゑ　り
本堂　本堂
提灯　チョウチン
折　折

見えます。

舞鶴城むかしの城のあと問へば
　高き謝恩碑つるの噴水

謝恩碑のわきに上れば甲府市が
　一目に見えてこゝちよかりき

謝恩碑を下りガスタンクの側を通って北へすゝみ、武
田神社へ参拝して太田町公園へゆきました。
園を見て少し休み、里垣村の善光寺へお参りしました。　其處で動物
本堂の中に下げてある提灯の大きいのには誰も彼も驚き
ました。
善光寺から酒折へ向ひ酒折宮へ参拝し　酒折驛から電

た　に　私　思か　嬉　車　かけ　會　さ　町　無事　出来　行　寒　體

車に乗りましたが非常に混んで居て坐る席もありませんでした。困ってゐると一人の女學生が私に席をゆづってくれましたので私はどの位ありがたく思ったか分りません。それからもう一つ嬉しかった事は、電車の中で思ひがけなく松村先生にお會ひする事が出来た事です。其の時私は嬉しくて／＼涙が出さうでした。

電車は闇の中を通ったり明るい町を通ったりして無事に故郷へかへる事が出来ました。

旅行の事はこの位にしてもう止めておきませう。だん／＼寒くなりますから御身體大切にして下さいませ。

さよなら (11.17)

行様子　秋　た　の　も　ぬ　海　に　樂　暮　福　會　嬉　今

叔父に旅行の様子を報せ

高一　園田華都子

叔父様又秋になりました。

去年の旅行ももう一年昔になってしまひました。あの果しも知れぬ海、小山のやうな軍艦、實に壯觀でした。毎日あの樂しい海の上で暮してゐる叔父様達はまったく幸福でせうね。

去年八幡宮でお會ひした時のよろこびは今でもまだ忘れる事は出来ません。あの時私は嬉しいやら恥しいやら、何とも言へない氣がしてたまりませんでした。でも今考へると

思出	思出
此の	此の
は	は
見学	見學
實	實
よい	よい
に	に
色々	色々
か	か
私	私
大勢	大勢
登	登
を	を
私達	私達

んなになつかしい思出であるか分りません。

今年私たちの旅行は甲府方面でした。第一日は御岳の昇仙峡、第二日は甲府市内を見学しました。

御岳へ登ったときは實によい心持でした。白山の松もみどりを一層深めてとてもきれいに見えました。五月雨石、仙娥瀧、駱駝石等色々おもしろい物がありましたが、特に私のこころに強く感じたのは人面石でした。

大勢の人を追ひこしながら上へ〱と登ってゆきましたが、やがて仙娥瀧へ着きました。瀧の高いところから勇ましく落ちるのを見てゐるうちに私達のこころはたゞ〱躍る

紅葉	紅葉
此	此
落	落
水の音	水の音
か	か
て	て
た	た
す	す
明	明
町	町
市	市
色	色
程	程
足	足
思	思
當	當

ばかりでした。

長潭の水青みつゝ雲うつし
紅葉二つ流れてゆきぬ

此の山をとゞろき落つる水の音
皆肩ならべて瀧をながめし

御岳から私達がかへって来る時はもう疲れ切って足が棒のやうになり、半分泣き顔でやっと宿へつきました。それでも夕飯をすまして一休みするともうじっとして居る事が出来ず明るい町へ出かけてゆきました。夜の甲府の町はとてもきれいな色どられて目がくらむ程でした。こんな町の中で生活してみたいなと思ったのは本當です。

欠

は　を　見学　定　鶴　た　町　見　けり　酒折　車　無　か　り　迷惑　かけ　今　の　様子　と　致　朝晩　寒　折柄

は　を　見學　定　鶴　た　町　見　けり　酒折　車　無　か　行　迷惑　かけ　今　の　様子　と　致　朝晩　寒　折柄

第二日は甲府を見学する予定で、第一番に舞鶴城へ登りました。

謝恩塔　町を一目に見下せば

我のとまりたる宿も見えけり

町を見学して　武田神社、善光寺、酒折宮などにお詣りして、酒折の驛から電車に乗り　無事に谷村へつきましたから御安心下さい。

去年旅行で色々御迷惑をおかけしたお礼に、今年此旅行の様子をちよっぴりお知らせ致しました。次第に寒さ。朝晩お寒い折柄　お達者でお暮し下さい。

さよなら

(11.17)